

日本とスペインをつなぐ無料スペイン情報誌 [アクエドクト]

acueducto

La revista española en Japón

特集

バルセロナの 地下を巡る

-La Barcelona subterránea-

¥0

GRATIS/第19号

30-noviembre-2014

www.acueducto.jp



Asociación Cultural Española
スペイン文化協会

基礎から
しっかり
学ぶ!

スペイン語レッスン

話せる楽しさを実感しながら、スペイン語を身に付けよう!



新規開講入門クラスのご案内 (各クラス定員 4 名)

●2015年1月開講

月曜日 20:30-21:20 (2015年1月19日～4月6日)

火曜日 11:30-12:20 (2015年1月20日～4月7日)

火曜日 18:30-19:20 (2015年1月20日～4月7日)

土曜日 16:30-17:20 (2015年1月24日～4月11日)

入会金 16,400円 OFF !!

(2015年1月末まで)

初心者の方対象の新しいクラスなので、スペイン語が全くはじめての方でも安心してスタートできます!各クラス定員になり次第、締め切りますので、お早めにお申込ください。

無料体験レッスンのご予約はお電話で承ります

TEL:06-6346-5554

新規開講コースの日程が合わない方や、その他の曜日や時間をご希望の方はお気軽にお問合せください。また、学習経験者の方は是非一度レベルチェックを兼ねた無料体験レッスン(要予約)をお試しください。レベルに合ったクラスをご案内いたします。

お問合せは
こちら!

スペイン語教室アデランテ

(JR大阪駅「桜橋口」徒歩5分)

TEL: 06-6346-5554 E-mail: info@adelante.jp

www.adelante.jp

スペイン・中南米 留学セミナー開催中!



www.spainryugaku.jp

スペイン留学.jp

E-mail: info@spainryugaku.jp

TEL: 06-6346-5554

いつかスペイン語圏に留学してみたいな...と考えているあなたへ!
スペインの都市、学校・コース、滞在方法、費用、学生ビザ、準備方法等を
留学経験のあるスタッフが詳しくご説明いたします。
是非お気軽にご参加ください!
セミナー後、個人カウンセリングもご予約承ります。

【日時】

12月23日(火・祝) 11:00～

1月12日(月・祝) 11:00～

2月11日(水・祝) 11:00～

セミナー所要時間 約40分 / その後個別カウンセリング

【場所】

スペイン語教室アデランテ

〒530-0035 大阪府大阪市北区梅田2-5-8-2F

※ 参加ご希望の方は、必ず事前にお電話にてお申込ください。

【お申込・お問合せ】

有限会社ADELANTE

TEL:06-6346-5554 E-mail: info@spainryugaku.jp



スペイン情報誌 acueducto 定期購読 のご案内

定期購読をご希望の方に、送料をご負担いただき、ご自宅までお届けしております。ご希望の方は、右の4項目を明記し、ファックス、郵送、E-mailのいずれかでお申込みください。お申込書を返送致します。※冊子のお届けはお申込書提出・ご入金後となります。

① 氏名 ② 電話番号 ③ ご住所 ④ 必要部数

【お申込先】

1. 郵送の場合

大阪市北区梅田2-5-8 千代田ビル西別館2F
有) ADELANTE 宛

2. ファックスの場合 06-6110-5122

3. E-mailの場合 info@acueducto.jp

【送料】1,200円(1年間:4号分)



Avanzamos

A1

www.
adelante
shop.jp

【お問合せ・ご注文は】

有限会社ADELANTE

〒530-0001 大阪市北区梅田2-5-8

千代田ビル西別館 2F

TEL: 06-6346-5554 FAX: 06-6110-5122

E-mail: info@adelanteshop.jp

1,944円(税込)

本書は、初めてスペイン語に触れる方を対象とした入門者向けスペイン語テキストです。
プライベートレッスン、グループクラスの両方で使用可能。8課から構成され、A1レベルに相当する口答表現、文章読解、聞き取り、読解の4技能を伸ばしながら、2セメスター(1年間)かけて学習できるため、大学でのスペイン語の授業にも最適です。
カラフルな写真やイラストが多く使われ、スペイン語学習に自然に親しむ事ができるよう視覚およびコミュニケーションに重点を置いて作られています。このテキストの終了時には、完璧ではないものの、現在完了を使って過去を表現し、[ir a + 不定詞]を使って未来を表すことができるようになります。



ESPECIAL	特集	5
	バルセロナの地下を巡る -La Barcelona subterranea-	
GASTRONOMÍA	グルメ	14
	ブドウ色の地図からスペインワインよもやま話その3-トレドの山の麓で-	
FÚTBOL	サッカー	21
	スペインサッカーを巡る 第7回	
ESPAÑOL	スペイン語	22
	スペイン語を話そう Lección1 自己紹介しよう その1 スペイン語講座 lección19 極性の副詞の用法について	
MÚSICA	音楽	27
	音楽の時間「バレー・リュス」とスペイン その1 ギター博物館 アントニオ・デ・トーレス	
VIAJES	旅	33
	エコ・エスパーニャ vol.6「タワー式太陽熱発電」	
HISTORIA	歴史	37
	Un samurái dividido que une cinco países スペイン内戦が生んだ「ロバート・キャパ」(5)	
JAPÓN Y YO	日本とわたし	39
	Antonio Gil de Carrasco (アントニオ・ヒル・デ・カラスコ)	
ARIOS	その他	43
	在関西スペイン人との交流懇親会 スペインのお勧めバー・レストラン vol.9 MECHELA スペイン小橋 第1回 西宮市国際交流協会 スペイン語おしゃべりの会 活動のご紹介	



スペイン情報誌 acueducto

Director:
Shoji Bando 坂東省次

Editor:

Alejandro Contreras
アレハンドロ・コントレラス

Maquetación y diseño:

Sachi Yamakage 山陰さち

Colaboradores:

Yo Kawanari 川成洋
Kuniyoshi Nakai 仲井邦佳
Mari Wataname 渡辺万里
Shizuka Shimoyama 下山静香
Yuji Shinoda 篠田有史
Antonio Gil de Carrasco アントニオ・ヒル・デ・カラスコ
Kaname Ikemoto 池本かなめ
Elena Contreras エレナ・コントレラス
Jesús Martín ヘスース・マルティン

ADELANTE Co., Ltd
2FL. Chiyoda Bldg. West Annex
2-5-8 Umeda Kita-ku Osaka
530-0001 Japón

有限会社アデランテ

〒530-0011

大阪市北区梅田2-5-8

千代田ビル西別館2F

Tel: 06-6346-5554

Fax: 06-6110-5122

email: info@acueducto.jp

www.acueducto.jp

本誌の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。
本誌の内容および広告に関しては、発行元の責任の限りではありません。



Asociación Cultural Española
スペイン文化協会

ご挨拶

スペイン情報誌「acueducto」第19号をお届け致します

En los años 2013 y 2014 se realizaron numerosas actividades para celebrar el 400 aniversario del comienzo de las relaciones hispano-japonesas y el año de España en Japón, concluyendo con gran éxito. El próximo 2015 es el año conmemorativo del 400 aniversario de la publicación de la segunda parte de Don Quijote. Diez años antes, con motivo del cuarto centenario de la publicación de la primera parte de la obra, tuvieron lugar en España múltiples actos conmemorativos. Actualmente, con la crisis económica que atraviesa aquel país, desconocemos la repercusión que tendrá este acontecimiento.

En Japón, afortunadamente se está llevando a cabo la traducción de las obras completas de Miguel de Cervantes, autor de Don Quijote. El Departamento de Estudios Hispánicos de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kioto está organizando una conferencia sobre el Quijote y una exposición que recogerá las traducciones y libros de esta obra publicados en Japón desde la edad Meiji hasta hoy. Antiguamente las obras completas universales incluían el Quijote, mientras que en los actuales compendios se recoge Cien años de soledad, de Gabriel García Márquez. Por tanto, aunque el término Don Quijote ha echado raíces en nuestro país, ¿la novela Don Quijote será leída dentro de cien años en Japón? En cualquier caso, el 2015 será muy importante para Don Quijote de La Mancha tanto en España como en Japón.

Shoji Bando
Director



坂東省次 ぼんどうしょうじ / Shoji Bando

京都外国語大学スペイン語学科長・教授。
京都セルバンテス懇話会代表。
専攻はスペイン語学、日西交流史。
近著に「スペインを訪れた作家たち」(沖積舎)がある。

2013年から14年にかけて、「日本とスペイン交流400年」と「日本におけるスペイン年」を祝うさまざまな記念行事が開催され、多くの成果を残して幕を閉じた。そして年が明けての2015年は、スペインの生んだ世界的名著『ドン・キホーテ』の後篇刊行400周年の記念すべき年に当たる。2005年は同じ『ドン・キホーテ』の前篇刊行400周年に当たり、好調な経済発展を背景に、じつにさまざまな記念行事が国を挙げて開催されたが、スペインが経済危機の中にあつて、後篇の刊行400周年記念行事はどれほどの規模で開催されるのであろうか、少々心配ではある。幸い、日本では、『セルバンテス全集』がついに翻訳されるようであり、また京都外国語大学スペイン語学科でも、『ドン・キホーテ』に関する講演会をはじめ、日本で明治時代から今日まで出版された『ドン・キホーテ』の翻訳や研究書をできるかぎり一堂に集めて記念の展示会を開催しようと考えている。かつて世界文学全集には必ず『ドン・キホーテ』が含まれていたが、近年の世界文学全集にはガルシア・マルケスの『百年の孤独』が含まれている。ドン・キホーテという言葉はすでに日本文化に定着しているが、『ドン・キホーテ』は100年後も読み継がれているだろうか。2015年は『ドン・キホーテ』にとって重要な年になるであろう。

坂東 省次



www.facebook.com/acueducto.japon



@acueducto_japon

Colaboradores:



VEN AL COLEGIO DELIBES... ¡ SALAMANCA TE ESTÁ ESPERANDO !

コレヒオ デリベスにお越しください。 サラマンカがあなたを待っています！

歴史、芸術、学生の街として有名なサラマンカ。
この街では、訛りのないスペイン語が話されているため、
スペイン語を学ぶのにぴったりの環境です。

コレヒオ デリベスの教室で学ぶスペイン語は、サラマンカの通りで耳にするスペイン語とまったく同じです。ここでは訛りのない美しいスペイン語を学ぶことができます！

また、サラマンカは大都市の利便性と、小さな街の治安の良さや親しみやすい雰囲気の両方を兼ね備えています。

是非、サラマンカへお越しください！

きっとご自分の家にいるような心地よさを感じていただけると思います。



コレヒオ デリベスでは・・・

- 個人カウンセリングや希望に応じた柔軟な対応
- 14種類にも及ぶインテンシブコース(1日4～6レッスン)
- レベルは全14レベル
- 学生は若者からシニア層まで40カ国の国々から
- クラスの人数は最大10名
- 学校が厳選した滞在先(ホームステイ・学生寮・シェアアパート・個人用アパート・ホテル)
- スペイン文化やスポーツなど様々なアクティビティを提供
- エアコン完備の26教室と図書室
- スペイン料理教室

colegiodelibes

Y TÚ... HABLAS ESPAÑOL?

Colegio Delibes
Avda. Italia, 21
37007 Salamanca. España

Tfno: +34 923 120 460
Fax: +34 923 120 489
www.colegiodelibes.com
delibes@colegiodelibes.com



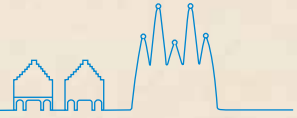
【特集】

バルセロナの 地下を巡る

— La Barcelona subterrànea —

サグラダ・ファミリアやグエル公園などガウディの作品が街に溢れ、
世界中から観光客が訪れるバルセロナ。
しかしその地中にもう一つの知られざるバルセロナがあることをご存知でしょうか。

今回は、ある研究グループが1年かけて発見した
バルセロナの地下世界を描いた本「La Barcelona subterrànea」を紹介。
地下からバルセロナの歴史を紐解きます。



La Barcelona subterrànea

地下のバルセロナ

Las ciudades tienen vida bajo nuestros pies y cuando se trata de una ciudad con tanta historia como Barcelona, recorrer el subsuelo de la ciudad puede convertirse en una manera única de conocer la huella del paso de los siglos, desde la ciudad romana hasta la actualidad.

En el libro “La Barcelona subterrànea”, un grupo de mujeres integrantes del Centro de Estudios de Simbología de Barcelona describe su investigación por el subsuelo de la ciudad. Durante un año se dedica a recorrer cuevas naturales, cursos subterráneos de agua, túneles de la época medieval, cloacas romanas, refugios de la Guerra Civil, antiguas minas de metal y de agua, grutas artificiales, hipogeos y salas de reuniones secretas, estaciones fantasma del metro.

Conclusión: la Barcelona subterrànea es un gran laberinto donde todo está conectado, plagado de corrientes de agua y de energía, y cuyo centro es ni más ni menos que la Sagrada Familia de Gaudí. El genial arquitecto dotaba a todos sus edificios de estructuras subterráneas: la Casa Batlló, el Parque Güell, la finca Bellesguard. Todos ellos cuentan con pasadizos, salas, pozos y criptas construidos bajo el suelo y dotados de valor altamente simbólico.

A continuación reproducimos una selección de fragmentos del libro que relatan algunos de sus hallazgos:

“Vamos a dar cuenta de una realidad extraordinaria que hemos vivido en directo a lo largo de un año (de la primavera del 2010 al verano del 2011) y que nos ha conducido por unos parajes muy desconocidos de nuestra ciudad y de nosotras mismas. Hay una Barcelona oculta, y coexistente con la que vive sobre el asfalto, que ha aflorado a lo largo de esta investigación tan singular emprendida por el reducido grupo de mujeres del Centro de Estudios de Simbología de Barcelona al que pertenecemos. Nada de lo que recoge esta crónica es fantasía y ningún personaje ni situación se han inventado.”

街は私たちの足の下に息づいています。バルセロナのように、多くの歴史を持つ街の場合には、地下を歩くことが、ローマ時代から現代までの長い歴史の足取りをたどる唯一の方法です。

「La Barcelona subterrànea（地下のバルセロナ）」という本の中では、バルセロナ象徴学研究センター（Centro de Estudios de Simbología de Barcelona）に所属する女性グループが行った地下都市の研究について描かれています。一年間もの間、地下を歩き、自然に出来た洞窟、地下水路、中世のトンネル、ローマ時代の下水設備、内戦時代の避難壕、そして古い脈や水脈、人工的に作られた洞窟、地下埋葬室、隠し会議室、実在しない地下鉄の駅などを見て回りました。

そこで出た結論は、バルセロナの地下が水とエネルギーで満たされ、全てがつながった巨大迷路であり、そしてその中心はまさにガウディのサグラダ・ファミリアであるということでした。この天才的な建築家は、パトリョ邸やグエル公園、そしてフィゲラス邸をはじめとするすべての建物に地下構造を用いました。そしてその地下には、非常にシンボル性の高い、抜け道や広間、井戸、地下礼拝堂を造りました。

続いて、本の一部を引用し、彼女たちの発見をいくつかご紹介します。

「バルセロナには、アスファルトの上の世界と共存する、知られざるバルセロナがあります。それは、私たちバルセロナ象徴学研究センター所属の少数の女性グループが行ったユニークな研究中に姿を現し、1年かけてその事実を体験しました。この物語に出てくる登場人物や状況は決してフィクションではありません。すべて事実なのです。」



Cloacas de Barcelona. Jorge Zorrilla © バルセロナの下水道

La finca Can Altimira

“Según nos contó la monjita, esta casa la había hecho construir un tal señor Altimira, médico que partió a las Américas, y al volver muy enriquecido llevó a cabo este caprichoso proyecto, con su espléndido jardín romántico que incluía las grutas subterráneas ahora muy deterioradas. También nos señaló la fuente que antaño estuvo en el centro del patio y que en las noches de fiesta vertía champagne para obsequiar a todos los invitados.

—Pero el pobre murió en la miseria, tirado en un banco de las Ramblas, sin hijos ni otros descendientes.

(...)

A un lado de ese ensanchamiento, apareció una sala con una claraboya en el techo que dejaba entrar la luz del exterior, iluminando un par de grandes agujeros en la pared, que según nos explicaron los técnicos correspondían a los acuarios en los que el excéntrico Altimira tenía peces tropicales de todos los colores que nadaban entre algas y otras especies acuáticas recreando un alucinante mundo submarino.

Seguía otro tramo del corredor recubierto de cartón piedra con incrustaciones de estalactitas y estalagmitas verdaderas, algunas quebradas, que por lo visto procedían de otras cuevas, pero que parecían como formadas aquí mismo a lo largo de milenios. A mano derecha, otro ramal conducía hasta un pozo muy profundo y todavía provisto de agua, ahora probablemente contaminada pues las aguas fecales del reventón corrían en su dirección.

No dábamos crédito a lo que veían nuestros ojos, y muy sobrecogidas por este espectáculo subterráneo de sombras, brillos, piedras de distintas calidades y luces tamizadas en diferentes tonos, seguimos descendiendo por este lugar oculto y olvidado. Un trecho más adelante, otra estancia con una especie de fuente seca daba acceso a un pasadizo que nos condujo hasta la “atracción” más deslumbrante de todo este ámbito: la sala del eco.”

Can Altimira の屋敷

修道女が言うには、この屋敷はアメリカ大陸に渡ったアルティミラという医者が建てさせたものだそうです。彼は、アメリカ大陸で一財産を築いて、スペインに帰国し、今では荒れ果ててしまった地下洞窟を含む庭園を造るという突飛な計画を実行しました。また、修道女はその昔庭園の中央にあったという噴水も見せてくれました。パーティが開かれた夜には噴水にシャンパンを注いで招待客をもてなしたそうです。しかし、彼は、貧困の中、ランブラス通りにあった銀行で倒れて亡くなりました。子供もその他の子孫もない孤独な最期だったということです。

(中略)

この広がりの方には天窓のある部屋が現れました。天窓から入る外の光は壁にある数個の大きな穴を照らしています。専門家によるとこの穴は、風変わりなアルティミラが熱帯魚を飼っていた水槽がある場所と一致するそうです。色とりどりの熱帯魚は海藻の間を泳ぎ、他の海の生き物たちとともに、驚くほどの海中の世界を造り上げていたそうです。

そこから混雑紙で覆われた部分の回廊が続いていました。この部分には、本物の鍾乳石と石筍ではめ込んだ細工が施されていましたが、いくつかは壊れてしまっていました。見たところ、他の洞窟にできていたもののようですが、まるで何千年もの長い間にここで育まれたもののように感じます。右手には、井戸に向かって別の道が枝分かれしていました。とても深いこの井戸はまだ枯れていないようですが、吹き出した下水が井戸の方向に流れているため、おそらくその水は汚染されているでしょう。

私たちはこの目で見たものを信じられませんでした。陰や輝き、そして様々な種類の岩石と、それぞれ異なるトーンで反射する光が造り出す地下の光景。私たちはさらに暗く忘れられた場所へと降りていきました。少し進むと、枯れた泉のようなものがある部屋がありました。そこは私たちをこの場で最もまばゆいアトラクション “こだまの間” へ導く抜け道につながっていました。



1



2



1. Cueva en Can Altimira
Can Altimira の洞穴
2. Sala columnata de Can Altimira
支柱の並んだ広間
3. Con algunos técnicos y operarios de obra frente al acceso de las grutas de Can Altimira
Can Altimira の洞窟の入口前、技術者や作業員とともに

El Parque Güell

“Nos citaron temprano frente a la puerta principal del Parque, la flanqueada por las dos casas con los hongos alucinógenos en las chimeneas, lo cual fue excepcional pues nos pudimos tomar unas fotos con la escalinata vacía, sin ningún turista, aunque el frío era muy intenso.

Un muchacho del equipo de los conservadores, con su mono de trabajo gris y su gorro de lana del Barça, nos estaba esperando, y enseguida nos dirigimos hacia la trampilla que daba acceso a la gran cisterna.

Gaudí ideó un sistema para recoger y reconducir toda el agua pluvial del Parque hacia este depósito subterráneo, que en verdad era como una cripta, con sus enormes columnas geometrizando un ámbito a cubierto, pero conectado con los dos superiores, es decir, con el mercado y el teatro.

Y algo bien impresionante; el restaurador que nos acompañó todo el rato nos explicó que el muro de piedra del fondo de la sala hipóstila correspondía a la muralla original de la antiquísima masía que había en este enclave cuando Güell adquirió los terrenos. Justo por allí, brotaba antiguamente agua de un manantial, que el señor Güell vendió durante un tiempo y que, como se ve en la composición de esta etiqueta publicitaria, contenía ¡radioactividad inicial inducida en voltios hora, 30!

(...)

El siguiente eslabón de nuestro recorrido fue la que llaman “Cueva de los enanitos”, nombre con el que la han bautizado actualmente por su estrechez y chatura en algunos puntos. Está cercana a la cúspide del montículo de las tres cruces. Ciertamente, una vez dentro, vimos un par de ramales que iban en la dirección de la cima, pero por desgracia habían sufrido derrumbes y no distinguimos ninguno que fuera practicable. Así, pues, la llegada a la capilla subterránea, a la Capelya, no parecía tampoco accesible desde aquí.

(...)

—Venid, ahora iremos hacia la mina de agua —nos dijo aquel muchacho paciente y sencillo, amante de su trabajo, que nos abría paso y nos allanaba los accesos a los territorios más secretos del Parque.

Esta vez fue un recorrido horizontal, que se adentraba y se adentraba en la tierra hasta incidir con el eje vertical, el cual comunicaba las aguas subterráneas del pozo con el exterior.”

ゲエル公園

私たちは早朝、ゲエル公園の正門の前で待ち合わせました。正門は、煙突から幻想的なきのこが生えている二つの家の側にあります。非常に寒い日で、珍しいことに観光客が一人もいなかったため、公園の入り口にある階段で私たちだけで写真を撮ることができました。

作業服とバルサのニット帽をかぶった保存チームの男性一人が私たちを待っていました。そして私たちはすぐに大きな貯水タンクの入口となっている跳ね上げ扉へと向かいました。

ガウディは、公園に降り注ぐ全ての雨水を地下の貯水タンクに集めるシステムを計画しました。この貯水タンクは、まさに地下礼拝堂のようでした。巨大な円柱で幾何学的に造られた空間は屋根で覆われているが、地上にある二つのもの、つまり市場と劇場とつながっているのです。

中でも印象深かったのは、私たちに付き添ってくれた修復家が教えてくれたことでした。ガウディが土地を手に入れた時、この飛地にあった古い農家の壁は、多柱造りの部屋の奥にある石の壁と同じだそうです。ちょうどそのあたりでは、かつて水の湧き出る泉があり、一時期ガウディがこの水を売っていたそうです。そのパッケージラベルに書かれた成分を見ると、なんと 30v/h の放射能が含まれていました!

(中略)

次に見たものは、「こびとの洞窟」と呼ばれています。いくつかの地点でみられる道の狭さと低い天井から、現在になってそう名付けられました。ここは三つの十字架のある丘からほど近いところに位置しています。確かに、一旦中に入るといくつかの小道が頂上の方に向かって伸びているのですが、残念なことに、以前に起こった落盤のせいで、通行可能に見える道は一つもありませんでした。また、ここからでは、地下礼拝堂 “Capelya” へも辿り着けそうにありません。

(中略)

「こちらへ来てください。さあ、今から水脈へと向かいましょう。」と、忍耐強く、素朴で仕事熱心な青年は言いました。そして、公園の最も秘密めいたエリアへと続く道へと案内してくれました。

今度は、地上と水平になっている道です。地中をどんどん進んでいくと、井戸の地下水が外へとつながる縦穴に辿り着きました。



1.Accediendo a la cueva-almacén del Parque Güell ゲエル公園の洞穴に向かうところ
2.Cueva del Carmel en Parque Güell ゲエル公園のカレルメルの洞穴
3.Cueva en el Parque Güell 洞穴の内部
4.Pasadizos de la “cueva de los enanitos” 「こびとの洞窟」へつながる道

Barcelona romana y medieval

“—Hace unos años adquirí un local en la calle Boquer, cerca de la cual pasaba el antiguo camino romano. Yo tenía ese convencimiento, y los planos antiguos que consulté me lo confirmaron. Empecé la rehabilitación, y tras las paredes estucadas aparecieron piedras, luego me puse con el suelo; se descubrió un pozo medieval y los restos de una fragua. Seguimos excavando, y un poco más abajo surgieron restos romanos, y a más profundidad, adobes iberos. Tuve que llamar a los arqueólogos del MUHBA. En éstas que comenzó a entrar agua desde abajo, en abundancia, y contacté con Aguas de Barcelona, que me derivaron a la empresa privada que hace el mantenimiento del alcantarillado de la zona. Con un equipo de técnicos pasamos por el gran boquete abierto en lo más hondo de mi local, y eso fue como entrar en otro mundo. Increíble. La oscuridad era total, y el olor no lo olvidaré jamás. Fétido. Cuando enfocamos con las linternas no podía creer lo que veía. Como un inmenso río cubierto. Empezamos a recorrerlo; a derecha e izquierda encontrábamos derivaciones a cada paso. Las ratas se escapaban ante nosotros cuando las iluminábamos. Pero yo iba con la intención de hallar las lajas de pizarra del antiguo puente medieval que servía para cruzar este río cuando estaba descubierto. Tenía la certeza de que se ubicaban un poco más arriba de mi local, cerca de la capilla Marcús. Y las hallé. Aquí están las fotografías.

Entonces abrió un álbum que tenía preparado sobre la mesa y nos fue mostrando el testimonio de lo que nos había relatado hasta el momento. Si no fuera porque lo estábamos viendo con nuestros propios ojos, casi no lo creeríamos.

—¿Pero esto es de la época romana o medieval? —le preguntamos.

—De las dos. Y ahora entenderéis por qué. El camino romano, o sea la Vía Augusta, unía lo que después fue Sant Agustí Vell y Sant Agustí Nou y seguía hacia un lado y otro transversalmente. Posteriormente, ese tramo de la vía romana fue utilizado para canalizar durante un trecho las aguas que bajaban de una antigua riera llamada Merdençar y para derivarlas hacia el mar por un lugar que no era su curso natural. Entonces se tuvo que construir un puente para cruzar el gran canal, con piedras de pizarra, que es el que yo buscaba y encontré. Más adelante, como ese río recogía las aguas residuales de esta parte de la ciudad, por lo visto olía fatal, y se decidió cubrirlo, aproximadamente sobre el siglo XV. El tramo que yo recorrí es justamente el que va por debajo de Corders, Carders y llega hasta el Born, pero como os dije hay derivaciones a lo largo de todo el trayecto, siendo una de las importantes la que baja por debajo de la calle Montcada. Por tanto, esto que veis es un vestigio de distintas épocas superpuestas.”

ロマン主義と中世のバルセロナ

「数年前、私は、バルセロナのBoquer通りにある建物を購入しました。ここは、ローマ時代の道があった場所から近いと確信しており、古い地図でも確認することができました。改修工事を始めると、漆喰の壁の向こうから石が現れました。次に床に取りかかると、まず中世の井戸と炉の残骸を発見。続いて掘り進めると、もう少し深い場所にローマ時代の遺跡が、そしてその先にはイベリアの煉瓦が出てきました。そこで、MUHBA の考古学者を呼ばなければならませんでした。また、下から大量の水が入り込み始めたので、バルセロナ水道局に連絡したところ、この地域の下水設備の整備を行う民間の会社が派遣されました。技術者の一団とともに、この建物の一審奥にあった大きな割れ目に入っていくと、それはまるで他の世界に入り込んだような、驚くべき光景でした。真っ暗闇と二度と忘れることのできないであろう強烈な悪臭。懐中電灯であたりを照らして見たものを、私は信じる事ができませんでした。隠された大きな川が広がっていたのです。歩き始めると、右に左に頻繁に分かれ道があり、ネズミたちは懐中電灯に照らされると逃げていきます。しかし、私には、この川がまだ地上に出ていた頃に架けられていた古い中世の橋の石盤を見つけるという目的がありました。その橋がこの建物から少し先、マルクス礼拝堂の近くにあったという確信がありました。そしてようやく見つかることができました。これがその写真です。」

そこで、机に用意されていたアルバムを開けました。それは、その時まで語られていたことが真実であることを私たちに証明しました。写真を私たち自身の目で見ていなかったならば、おそらく信じることはできなかったでしょう。

「でもこれはローマ時代のものですか?それとも中世のものですか?」と私たちは尋ねました。

「その両方です。ご説明しましょう。ローマ時代の道、つまり Augusta 通りは、その後 Sant Agustí Vell 修道院となったものと San Agustí Nou 教会をつなぎ、交差して続いていました。その後、このローマ時代の道はしばらくの間、Merdençar と呼ばれていた古い雨溝を流れる水を、自然の流れに反して海に向かって運ぶための水路として使われていました。そのため、大きな水路を横断するために、石板を使って橋を造らなければならませんでした。この石板こそが、私が探し、発見したものです。しかし、後年になるとこの地域一帯の下水を集めていたこの川の臭いはひどく、地下に埋めてしまうことに決まりました。15 世紀頃のことです。私が歩いた区間はまさに、Corders 通り、Carders 通りの下にあり、Born 通りまで続いています。しかし、お伝えしたように、この水路の至る所に分岐があり、Montcada 通りの下を流れているのが最も重要な流れの一つです。あなた方が見ているものは、異なった時代が積み重なった異なる時代の足跡なのです。」



1. Sala subterranea de Cal Fideuer, en Badalona バルセロナにある Cal Fideuer の地下広間



2. En la sede del Espeleoclub de Gràcia Gràcia の Espeleoclub 本部



3. Contenido del misterioso envoltorio de Marigot Marigot のミステリアスな包みの中身

Descenso a las cloacas

Nos habían congregado a las nueve en punto en un callejón sin salida, cerca de la calle Boquer. Llegamos cada una con lo puesto, livianas de ropa, sin bolsos ni abalorios, sin joyas ni maquillajes. Allí, un equipo de operarios con sus trajes de trabajo impecables nos fueron repartiendo con orden y meticulosidad el equipo con el que debíamos cubrirnos y que estaba preparado con esmero: los monos blancos, las botas impermeables que llegaban hasta las ingles, un gorrito para recoger los pelos de la cabeza, el casco, los guantes y la mascarilla.

(...)

—Debemos procurar caminar despacio para no resbalar, en fila india, y siempre agrupados. Si les incomodara el fuerte olor, o la visión de algunas ratas, o se sienten indispuestas por cualquier motivo, no tienen más que decirnoslo y podrán salir rápidamente al exterior sin problema —nos explicó uno de los oficiales.

Y bajamos. Primero el responsable municipal, que se mantendría siempre a la cabeza de la expedición.

Luego introdujeron con una cuerda un cubo con todas las linternas, y después, calladas y siguiendo un orden procesional, todas y cada una de nosotras, entregadas a la inmersión en el inframundo.

Empezamos a desplazarnos con mucho tiento, pisando esa materia descompuesta y viscosa que hacía del suelo un terreno movedizo, inseguro; pero la primera visión que focalizó nuestra atención al iluminar con una linterna la pared lateral de la cloaca nos trasladó de inmediato a ese nuevo ámbito, virgen y ancestral a la vez, digamos que atemporal, y todo ello en medio de un caudaloso río de desperdicios.

—Fíjense, la pared está hecha con la piedra de Montjuïc —nos explicó el mayor de los acompañantes— y el suelo es la auténtica Vía Augusta. Nos encontramos en una de las cloacas más antiguas de Barcelona que todavía está en pleno funcionamiento.

Avanzábamos entre brumas y humedad, y esos vapores fruto de la putrefacción hacían que la luz emitida por los cascos frontales y las linternas se difractara en mil colores, brillantes, provocando visiones psicodélicas. Además, el hedor nos envolvió de tal manera que, o bien lo absorbías, o sucumbías de asco; y nos dejamos impregnar.

Súbitamente, se oyeron unos golpes metálicos, fuertes, como si de la fragua de Vulcano forjando los metales bajo tierra se tratara, y nos sobresaltamos.

—No se asusten, son las ruedas de los coches que al pisar los registros de las cloacas en la calle hacen este ruido tan violento —nos tranquilizó el guía.

(...)

Al otro lado de la corriente, por fin vislumbramos la salida hacia la luz y hacia el aire regenerador.”

下水管への降下

私たちは、9 時ちょうどに Boquer 通り近くにある行き止まりの道に集合しました。全員が手ぶらで、軽装、化粧もせず靴もアクセサリも宝石も身につけていません。そこでは、清潔な作業服に身を包んだ作業員の団が、私たちのチームに、入念に用意された装備である、白い作業用のつなぎ、ももの付け根まである防水の長靴、髪の毛をまとめる帽子、ヘルメット、そして手袋とマスクを渡してくれました。

(中略)

「滑らないように、一列になって、ゆっくり歩きましょう。グループから外れないように。もし、強い臭いやねずみの姿に気分が悪くなったり、何らかの理由で体調が悪くなった場合には、声をかけて下さい。すぐに外に出ることができますから。」と彼らの一人が私たちに説明しました。

いよいよ下に降ります。まず最初に隊の一番前を歩く市の責任者が降りました。すべての懐中電灯を入れたバケツにロープを付けて中に入れた後、私たちは沈黙を保ったまま、一人一人、一列になって地下の世界へと降りていきました。

私たちは、慎重に、足下を不安定にしている腐敗してネバネバするものを踏みながら移動し始めました。しかし、下水管の壁面を懐中電灯で照らした時に初めて見えた光景が私たちの注意を釘付けにし、すぐさまこの新しい世界へ連れていきました。昔からあるものでありながら未開拓、いわば時代を超越した場所、それがこの使われていない水量豊かな川の中にあるのです。

「見てください。この壁はモンジュイックの石でできており、床は本物の Augusta 通りです。私たちは今バルセロナで最も古く、まだまだ現役の下水管の一つにいるのです。」と付添人の年長者が私たちに教えてくれました。

湿気と霧があたりを覆う中進んで行きます。腐敗物から出される蒸気のため、ヘルメットの正面から放たれる光や懐中電灯の光は屈折し、色とりどりの光や輝きを放ち、まるで幻覚を見ているようです。その上、悪臭を吸収しているような、不快感に完全に打ちのめされたような状態で、悪臭に包み込まれて、すっかり臭いがしみ込んでしまいました。

突然、金属的な強い衝撃音が聞こえました。まるで、地中で武器を作っていたとされるウルカヌスの鍛冶場の音のようで、私たちを飛び上がらせました。

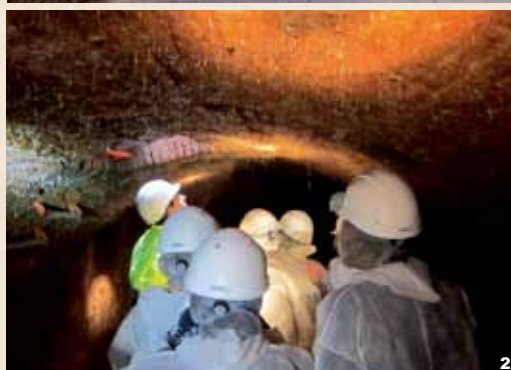
「大丈夫です。道路にあるマンホールのフタの上を車が通ると、このような凄まじい音がするのです。」ガイド役の方の説明で、私たちは安心することができました。

流れの先に、ようやくぼんやりと出口が見えてきました。それは、光と、そして私たちを生き返らせてくれる、きれいな空気へと続いています。



1. Operario quitando la tapa de la cloaca para el descenso
地下に入るため、作業員がマンホールのフタを取ります
2. Bajando a la mina del Monasterio de Pedralbes
ベドラルベス修道院の地下道に降りるところ
3. Ingresando las luces en la cloaca
懐中電灯をバケツに入れて地下に降ろします

- 1.A punto de bajar por la alcantarilla
マンホールから下水道に降りる前
- 2-3.Interior de la cloaca
下水管の中
- 4.Vigilantes guiando la expedición por
el interior de la cloaca
警備員が下水道の中を案内しています
- 5.Interior de la mina de Can Masdeu
Can Masdeu の地下道の中



Agradecimiento a :



**Editorial
Mediterrània**

今号の特集記事を編集・掲載するにあたって、
Editorial Mediterrània にご協力いただきました。
この場をかりまして、深く御礼申し上げます。



「La Barcelona subterrànea」

著者：Mireia Valls 出版社：Editorial Mediterrània

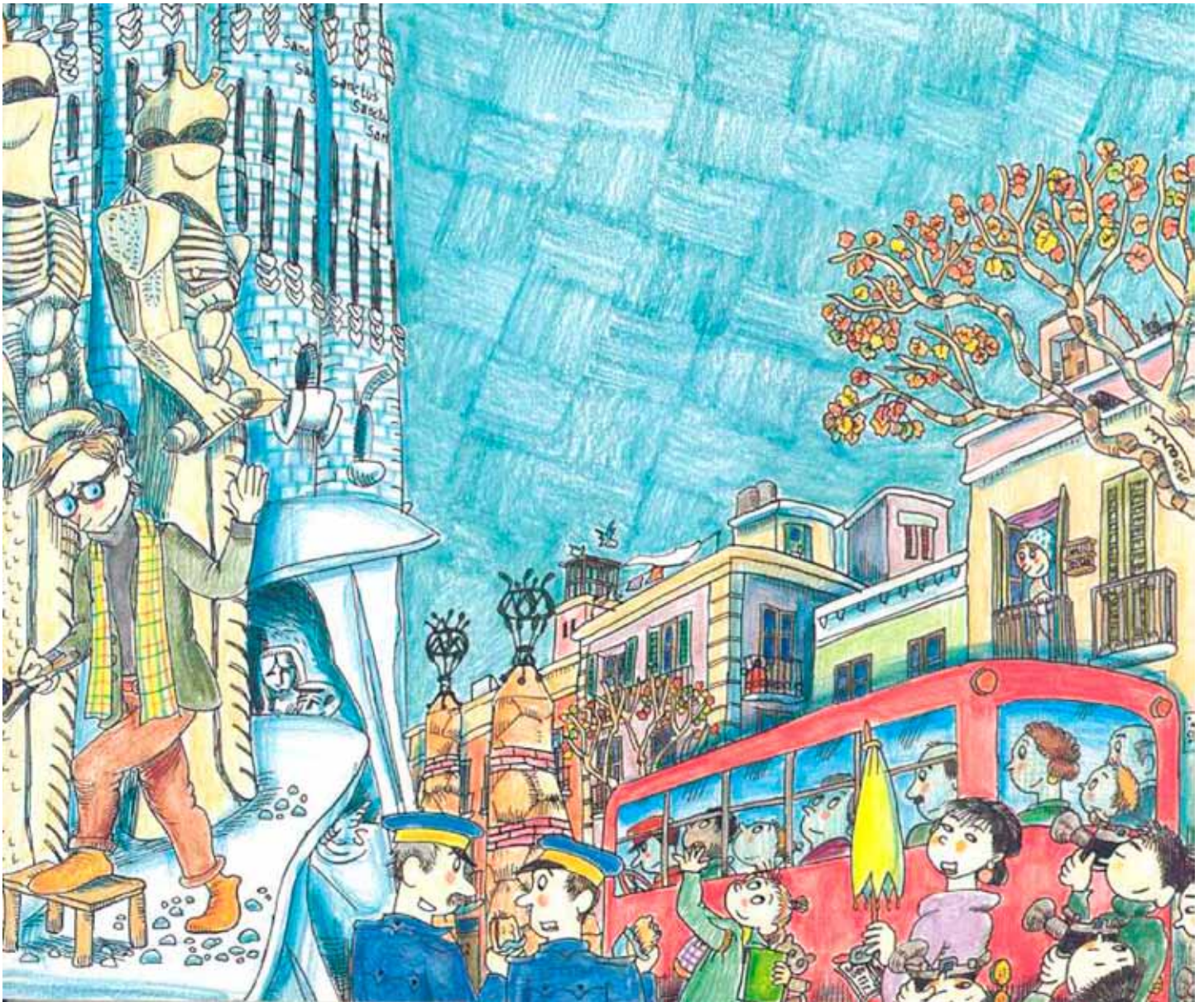
2012 年出版 / 296 ページ

¥4,536 (税込)

アデランテショップにて販売中

www.
adelante
shop.jp

【お問合せ・ご注文は】 有限会社 ADEL ANTE
〒530-0001 大阪市北区梅田2-5-8 千代田ビル西別館2F
TEL: 06-6346-5554 FAX: 06-6110-5122
E-MAIL: info@adelanteshop.jp



Conocido sobre todo como continuador de la obra de Gaudí en la Sagrada Familia, el escultor Josep M. Subirachs (Barcelona, 1927-2014) gozó en vida de prestigio internacional por el lenguaje simbólico de su obra y por su trabajo con materiales y texturas.

«El año 1986 fue particularmente clave para nuestro artista: recibió el encargo más importante de su vida. Se trataba de realizar la parte escultórica de la Fachada de la Pasión del templo de la Sagrada Familia de Barcelona. Aquello era un sueño para cualquier escultor, pero él quiso ser fiel a sus principios y, para aceptar, puso dos condiciones: tener la libertad de poder hacer su obra sin copiar el estilo de Gaudí, y poder vivir en el taller dentro del mismo recinto.»

«Desde el primer día se puso a trabajar, lleno de entusiasmo y dedicación, a veces día y noche, frenéticamente. Cuando le recomendaban que descansara más, que no se lo tomase tan a pecho y le decían que todavía le quedaban muchos años de trabajo por delante, él respondía irónicamente que, si le atropellaba un tranvía como a Gaudí, no quería que le cogiese con el trabajo también a medias.»

ガウディの作品、サグラダ・ファミリア聖堂の継承者として知られているジョゼップ・マリア・スビラックス（バルセロナ、1927-2014）は彼の作品に表れる象徴的言語、そしてこだわった素材と構成を用いることで名声を世界に博した。

この芸術家にとって、特に1986年が要となった。その年に人生で最も重要な仕事を依頼されたのである。それはバルセロナにあるサグラダ・ファミリア聖堂の受難のファサードの彫刻分野を担当するという仕事であり、当時の彫刻家なら誰もが夢見る仕事であった。しかし彼には彼自身のやり方があり、仕事を引き受ける際に2つの条件を提示した。ガウディのスタイルを模倣するのではなく自由に作品を製作できること、そして同じ敷地内の作業場で住むことの2つであった。

初日から仕事に情熱を感じ、献身的に取り組んだ。時折夜中にも熱心に仕事をすることもあった。周りの人からもっと休むように言われたり、まだ何年も先まで沢山の仕事があるのでそこまで執着しないように勧められても、彼は皮肉を込めて、「もし私がガウディのように路面電車でひかれて死んだとしても、未完成だと思わないで欲しい」と答えた。

¿Qué sabes de Josep M. Subirachs?

¿A cuál de estos personajes nunca le dedicó una obra?

- a) A Marilyn Monroe.
- b) A Miguel de Cervantes.
- c) A Charles Chaplin.

¿De qué materiales está hecha su escultura dedicada al Ictíneo, el submarino inventado por Narcís Monturiol?

- d) De bronce y hormigón.
- e) De mármol y plata.
- f) De acero y plástico.

¿A qué tema bíblico está dedicada la fachada de la Sagrada Familia que esculpió Subirachs?

- g) Al nacimiento de Jesús.
- h) A la creación del mundo.
- i) A la Pasión de Cristo.

¿Cuántos años vivió en el interior de la Sagrada Familia mientras duró su trabajo?

- j) Cuatro.
- k) Quince.
- l) Veintidós.

Soluciones: c) Al actor Charles Chaplin d) Se trata de una reproducción del submarino en bronce dentro de un bloque de hormigón. i) A la Pasión de Cristo, los dos últimos días de su vida. l) Veintidós, entre 1987 y 2009.



Para saber más:
"Pequeña historia de Josep M. Subirachs"
disponible en castellano y en japonés.

www.
adelante
shop.jp

【contacto】 ADELANTE Co., Ltd.
2FL, Chiyoda Bldg. West Annex 2-5-8 Umeda Kita-ku, 5300001
TEL: 06-6346-5554 FAX: 06-6110-5122
E-MAIL: info@adelanteshop.jp

ジョゼップ・マリア・スピラックスについて知っていますか？

彼が描くことのなかった人物は？

- a) マリリン・モンロー
- b) ミゲル・デ・セルバンテス
- c) チャールズ・チャップリン

ナルシス・モントリオルが製作した潜水艦イクティネオに捧げた複製作品の素材は？

- d) 銅とコンクリート
- e) 大理石と銀
- f) 銅とプラスチック

スピラックスが手がけたサグラダ・ファミリア聖堂のファサードの聖書のテーマはどれ？

- g) キリストの降誕
- h) 天地創造
- i) キリストの受難

作業の間にサグラダ・ファミリア聖堂で暮らした年数は？

- j) 4年
- k) 15年
- l) 22年

解答: c) 俳優チャールズ・チャップリン d) コンクリートと銅の組み合わせ e) 大理石と銀 f) 銅とプラスチック g) キリストの降誕 h) 天地創造 i) キリストの受難 j) 4年 k) 15年 l) 22年 (1987~2009年)



もっと知りたい人には:
"ジョゼップ・マリア・スピラックス物語"
スペイン語版・日本語版好評発売中!

www.
adelante
shop.jp

【お問合せ・ご注文は】 有限会社 ADELANTE
〒530-0001 大阪市北区梅田2-5-8 千代田ビル西別館 2F
TEL: 06-6346-5554 FAX: 06-6110-5122
E-MAIL: info@adelanteshop.jp

ブドウ色の地図から

スペインワイン
よもやま話

vol.3

トレドの山の麓で



トレド山系は、グアダイラとタホというスペインを代表する2本の川にはさまれ、トレド県とシウダ・レアル県にまたがるように東西に伸びています。高い山脈の多いスペインでは珍しい地形ではありませんが、この自然の条件が生み出した一角はとりわけ美しく、国立公園に指定されています。そしてその国立公園のなかに、今日私の訪れるボデガがあります。

数あるボデガのなかから今回の訪問先としてここを選んだ最大の理由は、このボデガが「ビノ・デ・パゴ」というジャンルに属しているからです。

スペインのワインは「デノミナシオン・デ・オリヘン」、つまり原産地呼称制度というシステムによって、品質を保証されています。この原産地呼称を説明するピラミッド型の図版に、近年異変が起こりました。

一番下から、産地を特定しない「ビノ・デ・メサ（テーブルワイン）」。「地方だけを決めてそれ以上うるさい条件は満たしてなくてもよい」「ビノ・デ・ラ・ティエラ（地方ワイン）」。「そこにおまけのように挟まれた」「ビノ・デ・カリダ・コン・インディカシオン・ヘオグラフィカ（個性を確立した地方ワイン）」が続き、その上に、スペインの主なワイン産地の多くが属している

「デノミナシオン・デ・オリヘン（原産地呼称ワイン）」があります。ここまで来ると、ブドウ畑の場所や収穫の条件、ブドウの品種など決められた条件をすべて満たさないと産地名を名乗ることはできません。そしてその上に、ラ・リオハとプリオラトという、疑問の余地なくトップクラスの産地である2か所だけが許された特別な指定、「デノミナシオン・デ・オリヘン・カリフィカーダ（特選原産地呼称ワイン）」が載っています。

しかし、このピラミッドの一番上に、数年前から突然、「ビノ・デ・パゴ（単一ブドウ畑限定高級ワイン）」というランクが出現したのです。いったいこれは何なのか？一番上にあるということは、一番良いということなのか？

しかも、このジャンルに属するボデガは、当初ラ・マンチャ地方だけに集中していました。ワインの生産量が多いことではスペイン随一だけれど、品質という意味ではトップクラスにランキングされてきた地方ではありません。どうしてラ・マンチャで、ビノ・デ・パゴが生まれたのか？このジャンルのボデガの共通項はどこにあるのか？それらの疑問をぜひ、実際にビノ・デ・パゴを作っている現場の人に解き明かしてほしいと、私は常々思っていたのです。

〔原産地呼称制度〕



- ① **Vino de Pago**
ビノ・デ・パゴ（単一ブドウ畑限定高級ワイン）
- ② **Denominación de Origen Calificada**
デノミナシオン・デ・オリヘン・カリフィカーダ（特選原産地呼称ワイン）
- ③ **Denominación de Origen**
デノミナシオン・デ・オリヘン（原産地呼称ワイン）
- ④ **Vino de Calidad con indicaciones geográficas**
ビノ・デ・カリダ・コン・インディカシオン・ヘオグラフィカ（個性を確立した地方ワイン）
- ⑤ **Vino de la Tierra**
ビノ・デ・ラ・ティエラ（地方ワイン）
- ⑥ **Vino de Mesa**
ビノ・デ・メサ（テーブルワイン）

マドリッドまで私を迎えにきてくれたのは、輸出担当をつとめているクリストフ。ベルギー生まれのハンサムな青年なのですが、彼の好物が日本料理であることを知った私は、こんな風にもちかけました。

「私の専門は、ワインではなくて料理。お宅のワインのことも、ピノ・デ・パゴというランクについても教えてほしいけれど、素人だから、的確な質問ができなくても許してね。そのかわり、マドリッドに帰ったらスシをご馳走するから!」

いつ見ても、うっとりするような佇まいのトレドの町の傍らを通り過ぎた車は、携帯電話の電波すら届かないような山のなかへとどんどん入っていきます。ハイウェイの傍らを時折動物の影がさっと通り過ぎていくのは、大きさからシカのようなだったり、野鳥のようなだったり。そして山を越えたところには、意外なほどのなだらかな沃野が広がっています。

魅力的な秘境と言ってもいいような地域ですが、こんな場所でワインを造ろうと思いつくのは、やはり大資本を後ろに控えた企業ということになるのだろうか、と実感してしまう風景でもあります。最近のスペインでは、農業として代々受け継がれてきたファミリービジネスとしてではな

く、大企業や異種の業界からのワインビジネスへの参入が目立ち、今日訪問するのも、そういった新しい系列に属するボデガなのです。

山のふもとの日当たりのいい土地に、ゆったりと広がるブドウ畑を前景として建てられた、なかなか風情のあるボデガに到着。ここからは、若いフランス人エノロゴ、ピエールが私の案内役を引き継いでくれました。

「このボデガは 2010 年から大きな方向転換を始めました。大きな資本投下をして設備もどんどん新しくしているし、ブドウの質を最高にするために、植え替えもしている。だから、これからのこのワインは、もっとすごくなりますよ。」

ピエールは、フランス語なまりのスペイン語で説明しながら、ブドウ畑へと案内してくれます。季節はずれで少しさびしい景色ですが、ブドウの葉が茂る頃には、どんなに美しくなるだろうと思わせる畑です。

「このボデガは 1987 年から始まりました。独特のミクロクリマ（微気候）、地質、800 メートルの海拔。何よりこの場所が素晴らしいのは、ものすごく暑いことが当たり前のこの地方にしては、温度の変化が比較的穏やかだということ。だから、ラ・マンチャでありながらフランス北部

のようなブドウが出来る。土地のバランスもブドウにあっている。それで、最初からカベルネ・ソーヴィニオンを作り始めたのです。ボルドータイプのワインを造ろうというのが最初のコンセプトでした。それから今まで色々挑戦してきて、どのブドウも素晴らしい仕上がります。まだ課題が残っているのはメルローだけかな。シャルドネからカベルネ、そしてスペイン土着のテンプラニージョまで、満足できる出来です。」

元々はブドウ栽培地域ではなかったところだから、好きなところに好きに選んだ苗を植えられる。そうやって特定の畑を作り上げてきたからこそ、「パゴ」と呼ばれる限定された畑のブドウだけから作られるワインに最適な条件なのだ、というピエールの言葉は、素人の私にもなるほどと頷けました。

「パゴは、フランスでいうクリュにあたる。スペインでは最近までなかった考え方けど、今では多くのボデガがこのスタイルのワインを造りたいと思っています。ただ、高いレベルに達しているボデガは、それほど多くない。だから、ピノ・デ・パゴとひと括りにされているけれど、実際にはバラバラなレベルのワインが混じっているのです。」



1 ボデガから眺めるトレドの山々。ラ・マンチャの過酷な気候とは山によって隔てられた沃野が広がる。

2,3,4 貴族の狩猟が盛んだったトレド地方の狩猟小屋をイメージしたというボデガの建物。

5 醸造家のピエールはフランス人。

6 発酵用の巨大な樽。

7 異なるブランドの高価なフレンチオークの樽が、熟成の各プロセスに合わせて配置されている。



ピラミッドの上部に置かれているからといって、ピノ・デ・パゴがスペインワインの頂点とは言えないのではないか、という私の疑問は正しかったことになります。そして、パゴというジャンルの判定をする前に、スペインにおけるワインの作り方そのものが大きく変わってきたことこそ、注目しなくてはいけないことだったのだと、私は改めて気づきました。

独自の個性を持つ畑だけに限定したブドウでワインを造る、と言うフランスでは当たり前の発想が、かつてのスペインでは当たり前ではありませんでした。リオハなどは逆に、広い範囲に微妙に条件の違う畑をたくさん所有し、そのブドウを巧みにブレンドすることで一定の個性を持つワインを毎年作れるということを自慢にしていたのです。そういうなかで、たとえ毎年作るワインの個性は変わっても、1か所のミクロクリマを表に押し出して高級ワインを造ろうという動きは、すでに20年前くらいから徐々に始まっていました。そしてついに、「大量生産ワイン」というイメージから脱却したい一心のラ・マンチャのワイン製造者たちが考え付い

たのが「パゴ」という格付けだったのです。

現在では他の地方にも少しはパゴに属するボデガが出来てきているとはいえ、たとえば既に十分高級ではっきりした個性を知られているワインなら、パゴという名称を付け加える必要はありません。逆に、豊かな資本力を使ってこれから独自のワインを売り出したいというボデガには、パゴを名乗ることでひとつのチャンスが与えられることになります。その成功例のひとつが、今日のこのボデガと言ってもいいでしょう。

贅沢な狩猟小屋を思わせる優雅なテイスティングルームで、クリストフとピエールが試飲につきあってくれました。さわやかな木の香りと香ばしいトーストを思わせるシャルドネ。ラ・マンチャの太陽のもとで熟した果実のあでやかさをまとったカベルネ…。それらのワインは、外来種のブドウが、この地の太陽によってどこまで変われるかという一つの見事な答えになっていました。このボデガの10年後のワインがさらにどんな変貌を遂げているか、また試飲させてほしいものです。



1 クリストフもピエールも、トレドから新しいワインの流れを発信しようと意欲満々。

2 ボデガのラインアップをすべて試飲。日本ではまだ発売されていないワインも数種ある。

3,4,5,6 ブドウ畑は、ラニャと呼ばれる独自の石灰分の多い粘土質の土壌を生かして展開されている。





伝統料理のエッセンスを新しいコンセプトで展開しようと意欲的なペベの料理。一皿ずつが楽しいだけでなく、メニュー全体としての構成も巧みで飽きさせない。



トレド県の町イジェスカは街道沿いの小さな町ですが、もうかれこれ 20 年くらい前に私はここを訪れたことがありました。地元出身の若い兄弟がやっているレストランの料理が、とても意欲的で面白いと聞いて、わざわざやってきたのです。

その時私を迎えてくれた兄弟が、今日も私を迎えてくれました。サービスを受け持つディエゴの頭は白髪交じりになったけれど人のよさそうな笑顔は変わらないし、ちょっと生意気な印象だったシェフのペベは、今もますます生意気なやんちゃ坊主のような雰囲気を残しています。「20 年前、ゴヤの絵がある教会に二人で案内してくれたわね、懐かしい。」

と私が言うと、

「お互い歳をとったね」

とペベが笑います。

「女性に、失礼でしょ！ テレビで意地悪を言う癖がついたのね！」

と私は憤慨してみせます。

実はここ 2 年ほど、ペベはスペイン中のお茶の間の人気者なのです。それというのは、「マステル・シェフ」というアメリカ生まれのテレビ番組のおかげ。素人の挑戦者が勝ち抜きコンテストを経て、プロの料理人を目指すという番組

組がずばぬけた人気番組となり、そこで審査員の一人を務めるペベもすっかり有名人になったわけです。

でも地元に戻ればペベは、お父さんから受け継いだレストランを切り盛りする一料理人。今日も、意欲的な料理を次々と出してくれました。

色彩感覚も鮮やかで躍動感のあるペベのメニュー。パッと見ると、いかにも売れっ子のシェフらしい華やかな料理ばかりですが、それを貫いているのは、「トレドの料理」「ラ・マンチャの料理」というはっきりしたアイデンティティでした。

ニンニクの巧みな変身ぶり。ホウレンソウのポタへの再構築。洗練されたデザートにアレンジされた昔ながらの菓子……。クラシックな料理が斬新な一皿に生まれ変わり、見慣れた食材が見たことのないような料理に変身してはいても、それは郷土料理という土台があるからこそ生まれたものなのだ、ということを、ペベの一皿一皿は雄弁に語っていたのです。

この店では、トレド生まれの料理人が、ラ・マンチャ生まれの食材と伝統のレシピとで、どこまで「地域の料理」から突出したものを作れるか試行錯誤し奮闘しています。それに対して、今日訪れたボデガでは、外国生まれの若者たちが、外国生まれの樽や機械を使って、

外国生まれのブドウを原料とするワインを造っています。

それでもなお、出来上がったワインに「スペイン」というセージョ（刻印）が感じられるとしたら、それこそがスペインの大地のもつ底力というものではないでしょうか。ワインがグローバルになりつつあることを嘆くのではなく、グローバルになりつつも、なお独自の個性をとどめるだけのパワーをワインに与えてくれるスペインという国の風土の魅力と、それを自在にあやつることを学びつつある若い世代の能力を讃え、その将来に期待すべき時代が来ているのかもしれない。

地方から世界へ飛び出そうとする料理と、世界を地方に集約しようとするワインとは、テーブルの上で見事なマリアージュを見せてくれました。かつてルネッサンスの萌芽を育んだトレドという歴史ある土地には、まだまだこれからも現代のルネッサンスが生まれそうです。そんな出会いを、皆さんも探してみてくださいね。

文・写真 渡辺万里

información

今回訪れたボデガ

Dehesa del Carrizal

住所：Retuerta del Bullaque, Ciudad Real, España
HP: <http://www.dehesadelcarrizal.com/>

レストラン

El Bohio

住所：Av de Castilla-La Mancha, 81, 45200 Illescas, Toledo, España
HP: <http://elbohio.net/>



El Bohio のシェフ、ペベ（左）と。

渡辺万里 わたなべまり / Mari Watanabe

学習院大学法学部政治学科卒。1975 年よりスペインで食文化史の研究に取り組みと同時に、スペイン料理界最前線の取材に従事する。1989 年、東京・目白に『スペイン料理文化アカデミー』を開設。さらに各地での講演、執筆などを通してスペイン文化の紹介に携わっている。早稲田大学文化構想学部非常勤講師。著書に「エル・ブジ究極のレシピ集」（日本文芸社）、「修道院のうずら料理」（現代書館）、「スペインの竈から」（現代書館）など。

<スペイン料理文化アカデミー>

スペイン料理クラス / スペインワインを楽しむ会 / フラメンコ・ギタークラスなど開催

〒171-0031 東京都豊島区目白 4-23-2 TEL: 03-3953-8414

<http://academia-spain.com>



WHY NOT MIXTA?

ミクスタしませんか?

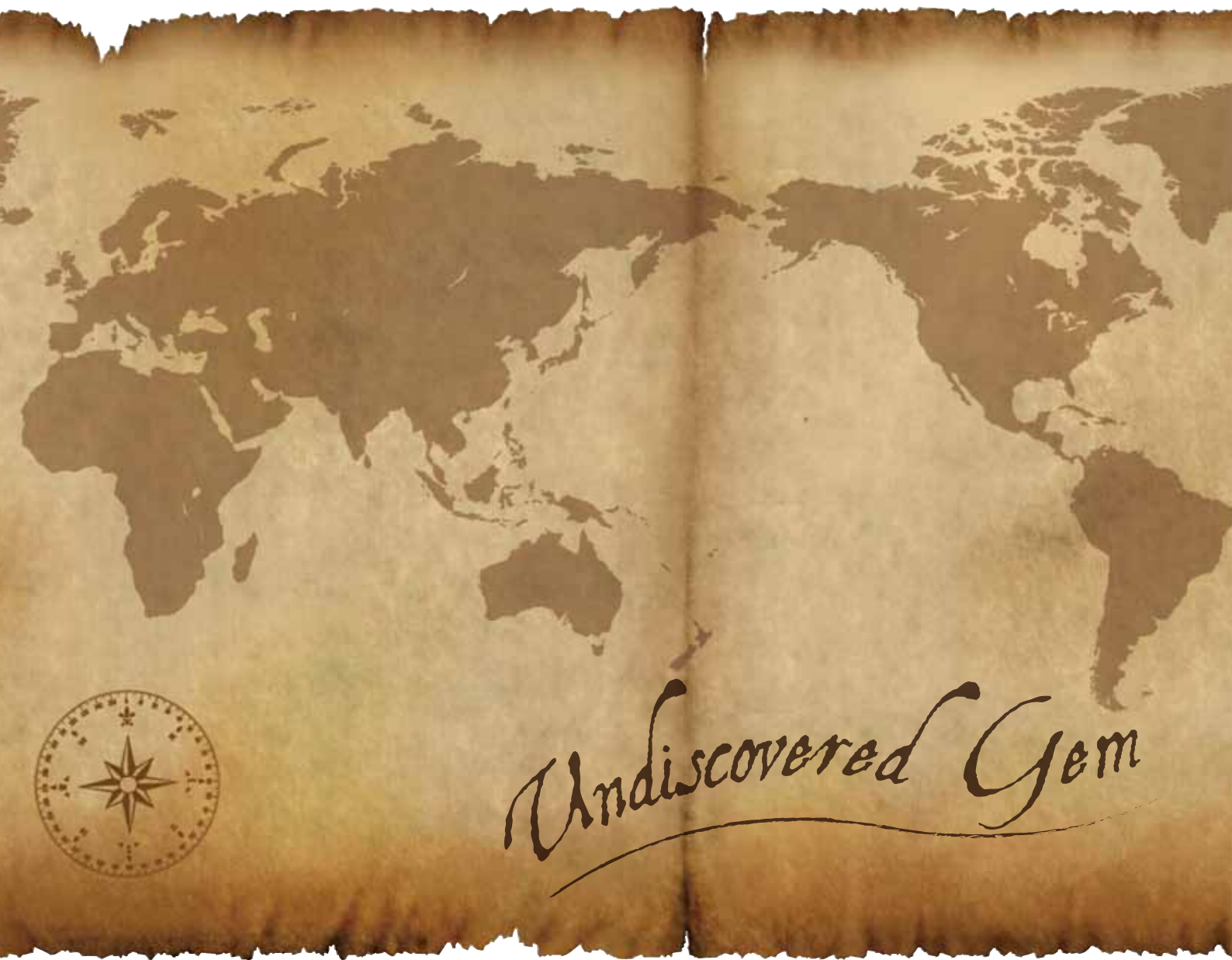
マオウ・シンコ・エストレージャスでおなじみの
スペイン「マオウ」から、ビールとレモン風味
の炭酸水をミックスした爽快な飲み物
「マオウ・ミクスタ」が新登場します。
スペインでは「クララ」という名前で親しま
れている定番の飲み物です。
また、ミックスされているビールにはマオウ・
シンコ・エストレージャスを使っています。

2015年春頃 発売予定!

※この商品はアルコール0.9%を含みます。20歳以上の方の飲用を想定して
開発した商品ですので、お子様の飲用はご遠慮ください。



世界からキムラへ。
キムラからあなたへ。



世界各国のまだ見ぬ酒・食材を求めて。



酒類総合商社
株式会社 **キムラ**

広島県広島市中区羽衣町13-12
TEL.082-241-6703 FAX.082-241-4375



<http://www.liquorlandjp.com>

キムラ 酒

検索



●お酒は20歳になってから。飲酒運転は法律で禁止されています。妊娠中や授乳期の飲酒は、胎児・乳児の発育に悪影響を与える恐れがあります。お酒は楽しく、ほどほどに。のんだあとはリサイクル。

¡No te calientes la cabeza: aprende español con CLIC!

Cuando un español te dice: “No te calientes la cabeza”, no te está pidiendo que no calientes o quemes tu cabeza, ni mucho menos. Sólo significa que no le des muchas vueltas a ese asunto; o lo que es lo mismo: que no te lo pienses mucho y que tomes una decisión rápidamente.

El español emplea muchísimas expresiones idiomáticas tanto en la comunicación escrita como oral; expresiones que nada tienen que ver con su significado literal. ¡Ojo!, no hay que confundirlas con los refranes. Aquí tienes las más populares:



考えすぎないで：CLIC でスペイン語を学びましょう！

スペイン人が“No te calientes la cabeza”と言うと、頭を温めない様に、焦がさない様にとっているのではありません。単に何かについて悩みすぎない様に、あまり考えすぎずに即座に決断をする様にという事を意味します。

スペイン語では文語、口語両方で通常の意味とは全く関連のない慣用句が多く使われます。尚、これらの表現は諺ではありませんのでご注意ください。今回は一般的なものをいくつかご紹介致します：



CLIC International House Sevilla y Cadiz

クリック・インターナショナルハウス・セビリア&カディス

Email: japan@clic.es (日本語でどうぞ) www.clic.es/jp (日本語サイト)

En Sevilla

✂ 移籍金ってなに？

2014 年ブラジルワールドカップ、スペインの 2 連覇に期待をしていた方も多かったと思いますが、結果は御存知の通りドイツが優勝、スペインは予選敗退となりました。

そんな中、今大会で活躍した選手たちはどんどんビッククラブへの移籍を成功させました。その際たる選手といえば、コロンビア代表のハメス・ロドリゲスです。そう、日本代表を完膚なきまでにやっつけてくれた張本人です。彼はワールドカップ終了後、スペインのレアル・マドリードに約 110 億円で移籍をし、現在は 10 番を背負っています。

さて、ここで気になるのが、110 億円と言われる巨額の移籍金。110 億円のお金はどこに入り、誰が払うのか。まさか、110 億円がハメス・ロドリゲスに全て入るのか？実は移籍金という言葉は聞いたことがあっても実情は知らない事の方が多いのではないのでしょうか。ということで、今回はヨーロッパにおける移籍金について簡単にお話させていただければと思います。

では、まず移籍金とは何か。移籍金とは、プロ選手が所属クラブとの契約期間中に、他のクラブに移籍するにあたって移籍先のクラブから移籍元のクラブに支払うお金のことです。よって、基本的には移籍金は移籍元クラブに入ることになります。また、契約期間が終了した選手が移籍する際は、一般的に「0 円移籍」と言われ、移籍金が発生せずに移籍することとなります。ハメス選手の例ですと、FC ポルトからモナコへの移籍時（5 年契約）は 62 億円、モナコからレアルの際は 110 億円ですから、モナコは移籍金だけで 48 億円を得たことになります。こう言った移籍を仲介するのがエージェントと言われるお仕事をされている方々で、エージェントは移籍金の数%を成功報酬として得ることになります。

この情報だけでと、「なんだ、プロクラブ間だけで大きなお金が動いているのか、我々には関係ない」と思われるかもしれませんが、実は育成段階で所属したチームに対してもプロ選手の移籍は大きく貢献しているのです。というのも、2001 年に FIFA は移籍する選手が 12-23 歳までに所属したクラブに対して、優秀な選手を育てた報酬として「連帯貢献金」というのを定め、選手が国際移籍をした場合に、移籍金の 5% が連帯貢献金として、12-15 歳まで所属したクラブは 1 年当たり移籍金の 0.25% を、16-23 歳までのクラブには 0.5% を、移籍先のチームに請求できることになっています。（EU 圏内において、EU 加盟国籍を持つ選手は国内選手として扱われるので、「連帯貢献金」は発生しません。）

例えば、ヨーロッパ外の選手がヨーロッパのチームに契約期間中に 20 億円移籍をした場合、12-15 歳まで所属したチームには 1 年に付き 500 万、16-23 歳までのクラブには、1 年に付き 1000 万円入ることになります。これにより、1 人の優秀な選手を育てることで、育成したクラブも金銭的に潤い、そのお金を使って更に良い育成環境をつくり上げることが出来るようになります。例えば、人工芝のグラウンドを作ることも可能ですし、クラブハウスを建てることも可能です。そういったお金の循環がうまく出来ると、より良い選手が生まれる可能性が高くなり、結果としてクラブ、国のサッカーのレベル UP にもつながっていくのではないかと思います。

そういった意味でも、日本選手の海外移籍が発表された際は、この移籍は育成にも役立っているのだな、と思っていただければ幸いです。

文・尾崎剛士
イラスト・Jesús Ángel Martín Sánchez



尾崎剛士 おさきつよし / Tsuyoshi Osaki

30 歳、愛媛県出身。2006 年まで筑波大学蹴球部にて選手、少年サッカー指導者として活動。引退後は大学院に進学、その後就職し、サッカーの現場から 2 年離れる。2010 年から町田高ヶ坂 SC にて指導を再開。2011 年 10 月にバレンシアに渡り、育成年代のコーチを経て、2014-15 シーズンは、アルボラヤ UD でユース B チームの第二監督、U-8 の監督を担当している。



¡Vamos a estudiar español!

スペイン語で話そう

Lección 1

スペイン語で自己紹介①

¿Cómo te llamas? / Me llamo...



自己紹介しよう：「名前は何ですか?」「わたしの名前は〇〇です。」

¡Hola! みなさん、こんにちは。

今号より「スペイン語で話そう」と題して、すぐに使えるスペイン語フレーズを紹介していきます!

まずは基本中の基本、自己紹介から! 名前の尋ね方、名乗り方を覚えましょう。

名前を尋ねる・名乗る時には、「llamarse」という単語を使います。

スペイン語は主語によって動詞が活用しますので、下の表のように、主語に合わせて動詞を活用させましょう。

主語	名前の言い方	名前の尋ね方・答え方
Yo わたし	Me llamo... わたしの名前は...	¿Cómo te llamas? きみの名前は何ですか? - Me llamo... わたしの名前は.....です。
Tú きみ	Te llamas... きみの名前は...	¿Cómo se llama? 彼・彼女(あなた)の名前は何ですか? - Se llama... 彼・彼女の名前は.....です。 - Me llamo... わたしの名前は.....です。
Él / Ella / Usted / 彼・彼女 あなた	Se llama... 彼の名前は...	

+a で覚えよう!

[SALUDOS 挨拶表現]

¡Hola!	こんにちは
¡Buenos días!	おはようございます
¡Buenas tardes!	こんにちは
¡Buenas noches!	こんばんは

¡Hola! は1日中使える便利な挨拶。スペインでは、お店やバルに入る時も「¡Hola!」と挨拶します。帰る時は、「¡Adios! (さようなら)」や「¡Hasta luego! (またね)」と挨拶すれば完璧です。積極的に声を掛けてみましょう!



- ・一般・旅行・商業・DELE検定対策・プライベートなど目的やペースに合わせて選べるコース
- ・ネイティブ講師だからプチ留学気分です!
- ・振替ができるので忙しくても安心!
- ・月謝払いOK!
- ・無料体験レッスン、教室見学等☆随時受付中

有限会社ADELANTE

〒530-0001 大阪府大阪市北区梅田2-5-8千代田ビル西別館2F

TEL: 06-6346-5554 FAX: 06-6110-5122 www.adelante.jp



AVANZAMOS A1

- 日本の学習事情を考慮して作られた西語で西語を学ぶ入門者向けテキスト
- 個人授業／グループ授業 使用可
- 充実の104P(オールカラー)・CD付
- ￥1,944 (税込)

アデランテショップで好評販売中!

www.adelanteshop.jp

ス ペ イ ン 語

講座 Lección 19

今回のテーマ

極性の副詞の用法について

Sobre el uso de adverbios de polaridad

ここ最近の本欄(16号～18号)では様々な種類の副詞について扱ってきました。今回は副詞シリーズの最後として、「極性の副詞」を取り上げます。ただ、今回も必ずしも厳密に副詞だけを扱っていないことをあらかじめお断りしておきます。

テーマに挙げた「極性の副詞」という用語は、実はあまり一般的ではないのですが、学習者のみなさんがイメージしやすいかも(?)と採用しました。頭の中で以下のような一本の矢印を思い浮かべて、その両極を「+」と「-」とを想定してみてください。



上の図では代表的な *también* / *tampoco* のペアを例として挙げてみました。それぞれ肯定と否定を表す副詞です。

肯定の副詞 *también* は、様々な文の構成要素(主語、目的語、場所や時の副詞句など)に係ることが出来ます。問題はその位置ですが、いろんな場所に置くことができます。例として次のような文を使います。

Yo tomo el café por la mañana en mi casa.

僕は朝、家でコーヒーを飲む。

以下に *también* をいろんな場所に挿入してみました。太字下線部分が修飾されている要素です。

Yo **también** tomo el café por la noche. 僕は夜、家でコーヒーを飲む。

Yo tomo **también el café** por la noche. 僕は夜、家でコーヒーも飲む。

Yo tomo el café **también por la noche**. 僕は夜も家でコーヒーを飲む。

このようにどの位置に置くかによってどこに係っているかが変わってきます。ただし、上の説明はかなり単純化したものです。実際には文脈によって別の要素に係っていると解釈されることがよくあります。例えば、Yo **también** tomo el café por la noche では *también* は *yo* ではなく、後の "tomo el café" に係り、「僕は夜(テレビを見たり、勉強したりするけれども、また)コーヒーも飲む」と解釈することもあります。実際の会話中では文脈が大きな意味を持つことにはくれぐれも留意してください。

también を用いた便利な表現に "no solo ~ sino también ..." 「単に～だけでなく…も」があります。

Los sucedáneos de pescado como "kanikama" están muy difundidos, **no solo** en Japón **sino también** en el extranjero.

「カニカマ」のような魚の代用品は、日本だけでなく外国でもよく普及している。

también の否定形、つまり「～もない」が *tampoco* です。ただし、他の否定語(*nada*, *nadie*, *nunca*, etc.)と同じく、動詞の前では別途、否定の "no" を必要としません。

Mañana **tampoco** abrimos la tienda porque es festivo.

明日も店を開けない、祝日だから。

さて、2つの要素を取り上げてどちらも肯定する、つまり「A も B も」に相当する構文は "tanto A como B" です。

Me interesa **tanto** la antigua civilización maya **como** la cultura islámica, por eso estoy dudando entre estudiar en México y en España.

私はメキシコのマヤ文明にもイスラム文化にも興味があるので、メキシコで勉強するかスペインで勉強するかで迷っている。

逆にどちらも否定する「A も B も～ない」には "ni A ni B" を使います。

No tengo **ni** dinero **ni** tiempo. ¡Pobre de mí!

私にはお金も時間もない。かわいそうな私!

también と同様に「付加」を表す表現に "además" 「～に加えて」や "incluso" 「～さえ」などがあります。例を挙げておきます。

Ayer no salí de casa porque estaba cansadísima y **además** llovía a cántaros.

昨日は家から出なかった。とても疲れていたし、それに加えて土砂降りだったから。

Esta tableta es muy fácil de manejar. **Incluso** un niño de cinco años podrá utilizarla.

このタブレットはとても使いやすい。5歳の子供でさえ使えるだろう。

「付加」の反対の意味である「除外」を表す表現も確認しておきましょう。excepto や menos や salvo が「～を除いて」に相当する語です。文法的にこれらを前置詞と習ったと思いますが、注意が必要です。人称代名詞が前置詞の後に来る場合は、いわゆる「前置詞格」(*mí*, *tí*, *sí*, ...) になるはずですが、しかし、そうはならないのです。例文で説明します。

Todos los alumnos, **excepto yo**, aprobaron el examen de esta asignatura.

僕を除いて全ての生徒がこの科目の試験に合格した。

A todos de nuestra familia, **excepto a mí**, les gusta mucho estudiar lenguas extranjeras. うちの家族は、私を除いてみんな外国語を勉強するのが好きだ。

このように *excepto* の場合は *excepto mí* ではなく、*excepto yo* や *excepto a mí* になることに注意が必要です。つまり、文法的には完全な前置詞とは言えないのです。一方、発音的には前置詞と同じで強勢を置かないで読みます。ですから、副詞と前置詞の間であると言ってもいいかも知れません(言語学者の間でも意見が分かれています)。今回のテーマから少しそれますが、同じ現象は *según* や *entre* でも起こります(*según tú*, *entre tú y yo*)。

最後に、casi 「ほとんど」/ apenas 「ほとんど～ない」の用法を確認しましょう。

Mi marido **casi** ha terminado las tareas domésticas de hoy.

うちの夫は今日の家事をほとんど終わった。

Mi marido **apenas** ha empezado las tareas domésticas de hoy.

うちの夫は今日の家事をほとんど始めていない。

副詞と言うものは実に多様な言葉の集まりであることがよくわかったことと思います。また、文法的にはっきりと割り切れないケース(副詞か前置詞かなど)も意外に多いのです。ややこしいですね。でもだからこそ言語というものは魅力的である、とは思いませんか?

¡Hasta la vista!



仲井邦佳 なかいくによし/Kuniyoshi Nakai

立命館大学産業社会学部教授。京都イスパニア学研究会会長。専門はスペイン語学。著書に『はじめてのエスパニョール』(共著、三修社)、『中級スペイン語—文法と演習—』(共著、同友社) などがある



スペイン&中南米への留学相談、手続き代行無料サービスのスペイン留学.jp

スペイン留学ガイド



地方ごとに異なる特色を持った魅力溢れる国、スペイン♪

あなたはスペインと言ったら何を思い描きますか？

フラメンコ、サッカー、闘牛、白い家、サグラダ・ファミリアなど...

お気に入りの街が見つければ、より充実した留学生活になることでしょう。

留学準備の第一歩は、学校を探すことから始まります。

ここでは、代表的な留学先をいくつか紹介していますが、

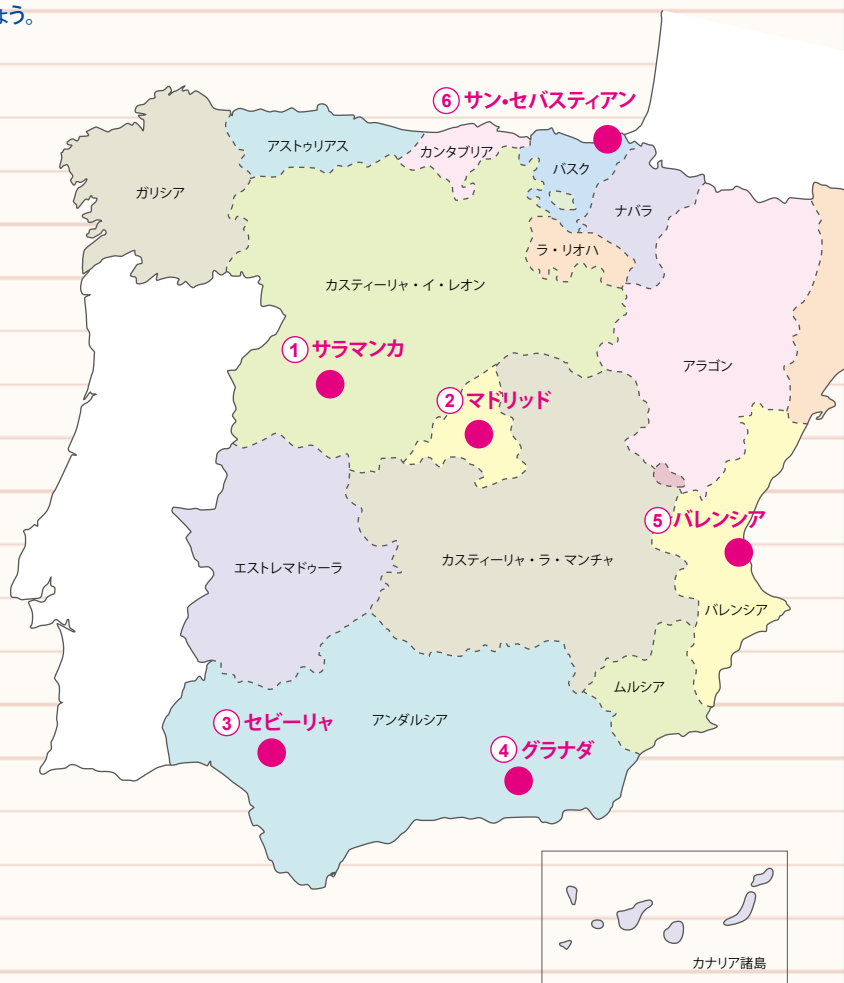
この他にも多くの学校をご用意しております。

まずは、電話やメールでご相談下さい。

スペイン留学.jp では、カウンセリングを行い、

一人一人のご希望に合った学校を提案いたします！

※料金は 1€=145 円で計算した 2014 年 11 月のものです。
入学金や宿泊先斡旋料、夏期料金等が加算される学校も
ございますので、詳細につきましてはお問合せ下さい。



① サラマンカ

1218 年に創立されたスペイン最古の大学がある学生の街。カatedral、大学、貝の家、マヨール広場など美しい建物が多く、旧市街全体が世界遺産に登録されています。



<コレヒオデリベス>

	2 週間あたり	24 週間あたり
一般集中スペイン語コース (20 時間 / 週)	346 € / 50,170 円	2.880 € / 417,600 円
ホームステイ (個人部屋 / 2 食付)	280 € / 40,600 円	3.360 € / 487,200 円
共同アパート (個人部屋 / 食事なし)	210 € / 30,450 円	1.860 € / 269,700 円

② マドリッド

プラド美術館や王宮など見所いっぱいの活気溢れるスペインの首都。休日にはショッピングやバル巡り、アート観賞を楽しむことができます。スペインの中心に位置するマドリッドは他の都市へのアクセスも良好です。



<エストゥディオサンペレ マドリッド校>

	1 週間あたり	24 週間あたり
一般集中スペイン語コース (20 時間 / 週)	229 € / 33,205 円	3.600 € / 522,000 円
ホームステイ (個人部屋 / 2 食付)	205 € / 29,725 円	4.920 € / 713,400 円
共同アパート (個人部屋 / 食事なし)	150 € / 21,750 円	3.600 € / 522,000 円

③ セビーリャ

太陽と青い空が似合うスペイン南部、アンダルシア地方にある街。バスや電車で少し足を延ばすと、まるで絵ハガキのような白い村が点在し、陽気でのんびりとした空気を肌で感じることができます。



<クリック IH セビーリャ校>

	1 週間あたり	24 週間あたり
一般集中スペイン語コース (20 時間 / 週)	180 € / 26,100 円	3.600 € / 522,000 円
ホームステイ (個人部屋 / 2 食付)	160 € / 23,200 円	3.840 € / 556,800 円
共同アパート (個人部屋 / 食事なし)	100 € / 14,500 円	2.400 € / 348,000 円

⑥ サン・セバスティアン

バスク地方独自の文化が息づく街。「美食の都」として有名で、美味しい魚介類やピンチョスが堪能でき、数多くのバルが軒を連ねる通りはいつも賑わっています。



<ラクンサ・インターナショナルハウス>

	1 週間あたり	24 週間あたり
一般集中スペイン語コース (20 時間 / 週)	168€ / 24,360 円	3,000€ / 435,000 円
ホームステイ (個人部屋 / 2 食付)	230€ / 33,350 円	5,520€ / 800,400 円
共同アパート (個人部屋 / 食事なし)	120€ / 17,400 円	2,736€ / 396,720 円

⑤ バレンシア

「火祭り」とパエージャ発祥の地として有名な、スペイン第3の都市バレンシア。地中海性の温暖な気候で、ビーチリゾートとしても知られています。



<コスタ・デバレンシア>

	1 週間あたり	24 週間あたり
一般集中スペイン語コース (20 時間 / 週)	175€ / 25,375 円	3,085€ / 447,325 円
ホームステイ (個人部屋 / 2 食付)	175€ / 25,375 円	4,200€ / 609,000 円
共同アパート (個人部屋 / 食事なし)	110€ / 15,950 円	2,640€ / 382,800 円

④ グラナダ

アルハンブラ宮殿があることで、世界的に有名なグラナダは、アラブ文化の名残を残す古都。都市の規模はそれほど大きくありませんが、落ち着いた美しい町並みが素晴らしく、訪れる価値があります。



<ドン・キホーテ グラナダ校>

	1 週間あたり	24 週間あたり
一般集中スペイン語コース (20 時間 / 週)	145€ / 21,025 円	3,120€ / 452,400 円
ホームステイ (個人部屋 / 2 食付)	164€ / 23,780 円	3,936€ / 570,720 円
共同アパート (個人部屋 / 食事なし)	130€ / 18,850 円	3,120€ / 452,400 円

▶▶ ご出発までの流れ

① 留学カウンセリング、お見積り

「どの街にしよう?」「費用はどれくらい?」「何から準備すればいいの?」など、漠然とイメージされている留学プランや、目的・期間・ご予算など、まずはメールやお電話でお気軽にご相談下さい。

② 具体的に学校、コース、滞在スタイルなどのプログラムが決まれば、留学手続代行申込書を提出

③ 入学手続き開始

④ 航空券や保険、国際キャッシュカードなどの情報収集

⑤ ビザが必要な方は、申請に必要な書類を集め、在日スペイン大使館へ提出

90 日以内の留学なら学生ビザは不要ですが、91 日以上留学には学生ビザが必要です。短期学生ビザ (91 日以上 180 日以内) 取得の場合は、ご出発の約 2 ヶ月前、長期学生ビザ (181 日以上) 取得の場合は、ご出発の約 3 ヶ月前に時間に余裕を持って提出して下さい。

⑥ 留学費、海外送金手数料のご入金

⑦ 航空券、海外保険、学生ビザなど必要なものが揃えば、いよいよご出発!

<当サポートサービスの範囲>

- ・選択された学校への出願サポート
- ・サポート依頼を頂いた学校が手配するホームステイ、学生寮、共同アパート等の宿泊先申込手続 (混雑状況によりご希望に添えない場合がございますので、事前にご確認下さい)
- ・留学費用の海外送金
- ・空港出迎えサービスなど、各種オプションサービスの依頼代行
※未成年の方は、必ず保護者の方に同意を頂いた上、お申込み下さい
※パスポートやビザの申請、航空券・海外保険の手配等は含まれませんので各自でご準備下さい
※海外送金手数料 (約 8,000 円) はご負担となります

▶▶ よくある質問

Q 留学の費用はどのくらいかりますか?

A 主にかかる費用の内訳は、入学金、教材費、授業料、滞在費、航空券代、保険代です。学校のプログラムや、宿泊タイプ、都市によって、かかる費用は大きく違ってきます。長期留学される方向けに受講料の長期割引がある学校もあります。

Q 語学プラスαでどんなことができますか?

A フラメンコ、サルサ、スペイン料理、ワインテイスティング、ゴルフ、テニス、サーフィン、スキューバダイビング、スペインタイルなど、様々な楽しいプログラムをご用意。また、50 歳以上の方向けに、ゆっくりスペイン語を学び文化を楽しむコースもあります。

Q どんな滞在スタイルがありますか?

A ホームステイ、共同アパート、学生寮、個人フラット、ホテルなどがあります。

スペイン留学.jp では、ご希望に合った学校選びや、プランの作成など幅広くお手伝いしております。漠然とイメージされている留学プランや、目的・期間・ご予算など、まずは、お気軽にご相談下さい。

【お問い合わせ】

スペイン留学.jp

URL : www.spainryugaku.jp

TEL : 06-6346-5554

E-mail: info@spainryugaku.jp



<https://www.facebook.com/spainryugaku.jp>
「いいね!」をクリックして今すぐスペイン留学の最新情報を入手しよう!



@spainryugaku
ツイッターでも留学情報を配信しています!





ヘッドオフィス

Tel.: +34 923 26 88 60
asia@donquijote.org



アジア学生全体に占
める割合は10%以下

12ヶ国36都市に校舎がある
25以上のコース: インテンシブコース、
DELE対策コース、フラメンココース、
プレミアムコース、インターンシップなど
1週間から40週間まで、全レベル対象、
毎週月曜日スタート、少人数クラス
ホームステイ、シェアアパート、レジデンス

donQuijote
スペイン語コース
1986年創立

スペイン語を生きよう
スペイン、コロンビア、コスタリカ、エクアドル、メキシコ

スペイン
ラテンアメリカ

アリカンテ/バルセロナ/グラナダ/ガッ/マドリッド/マラガ/マルベリャ/サラマンカ/セビリア/テネリフェ/バレンシア
アルゼンチン/ボリビア/チリ/コロンビア/コスタリカ/キューバ/ドミニカ共和国/エクアドル/グアテマラ/メキシコ/ペルー

www.donquijote.org

ideal
education group

MUSEO DE LA GUITARRA ANTONIO DE TORRES

ギター博物館 アントニオ・デ・トーレス

文・吉川二郎

アクエドゥクト 18 号で茨城県にあるギター文化館を紹介させて頂きましたが、今号ではスペイン・アルメリア市にできたアントニオ・デ・トーレスギター博物館のパンフレットから紹介したいと思います。また、この博物館在勤の作家、カルロス・ゴンサレス・マルコスから「最もユニバーサルな楽器を照らす灯台」と題する原稿が送られてきましたので、続いてここに紹介します。

Dedicado a la figura del luthier almeriense Antonio de Torres (1817- 1892), el Museo de la Guitarra está llamado a convertirse en punto de encuentro de los amantes de la música en general y de la guitarra en particular.

アルメリアの偉大な弦楽器作家、アントニオ・デ・トーレス (1817- 1892) に捧げられたギター博物館は、一般的には音楽愛好家の、特にギター愛好家には、発見の場所と呼ばれています。

El visitante podrá conocer el universo de la guitarra e introducirse en las entrañas de la misma a través de elementos interactivos, audiciones, imágenes, talleres y actividades.

訪問者は、対話式のインタラクティブな要素、コンサート、映像、工房、アクティビティを通じてギターの世界を知り、その深部に入ることができます。

Nacido en 1817, Antonio de Torres, fue uno de los luthieres más ilustres de la historia. Su gran mérito fue ampliamente reconocido en España como mundialmente, siendo el constructor por antonomasia de la guitarra española tal y como la conocemos hoy en día.

1817 年に生まれたアントニオ・デ・トーレスは、ギターの歴史上最も著名な作家の一人でした。彼の大きな功績はスペインだけでなく、国外でも広く知られ、今日知られている通りの、言わずと知れたスペインギターの制作者です。

No obstante, sus instrumentos eran también buscados por guitarristas clásicos de la talla de Julián Arcas y Francisco Tárrega, y con posterioridad por Andrés Segovia y Regino Sáinz de la Maza, quienes consideraban sus guitarras como auténticas joyas musicales.

彼の楽器はフリアン・アルカスやフランシスコ・タレガ、後にはアンドレス・セゴビアやサイン・デラ・マーサといった才能あるクラシックギタリストにとって、まさに探し求めていたものであり、本物の音楽の宝として評価していました。

Su más famoso modelo fue la guitarra conocida como “La Leona”. En ella, Torres resumió toda su maestría de luthier, valiéndole la confirmación como mejor guitarrero de la época. La Leona es citada por todos los especialistas e investigadores mundiales como el origen verdadero de los patrones actuales a la hora de construir este instrumento.

彼のもっとも有名な作品は「レオナ」と呼ばれるギターでした。そのギターに、トーレスは作家としてのすべての熟練の技をつぎ込み、その結果トーレスはその時代の最高のギター作家としての地位をゆるぎないものにしました。この楽器を作る時、世界中の専門家や研究家は現在の型の起源としてレオナを例に挙げています。

Podemos considerar a Antonio de Torres, sin temor a exagerar, como el equivalente a Stradivarius en el ámbito del violín. Almería tiene el orgullo de contar entre sus hijos más ilustres con este auténtico artífice de la guitarra, uno de los instrumentos más populares, vendidos y reconocidos en la historia de la humanidad. Sus guitarras, dotadas de un sonido especial, potente y melodioso, gran armonía y belleza en su acabado, se impusieron en adelante como modelo a seguir, no solo por la importante tradición guitarrera almeriense - como los hermanos Moya, discípulos de Torres, Miguel González Abad o Gerundino Farnández -, sino por todos los luthieres a nivel internacional.

大げさではなく、アントニオ・デ・トーレスはバイオリンの分野のストラディバリウスに匹敵するものだと思います。アルメリアは、人類の歴史上もっとも人気があり、世界中で売れ、認められている楽器の一つであるギターを作る本物の職人を持てたことに誇りを持っています。彼のギターは特別で力強く、よく歌い、調和のとれた音を持ち、仕上げも美しいため、以後続くべき手本として流行しました。それはトーレスの弟子であったモヤ兄弟、ミゲル・ゴンサレス・アバド、あるいはヘルンディーノ・フェルナンデスと言ったアルメリアのギター職人の伝統によるものだけではなく、国際的なすべての作家によって支持されたからなのです。

Antonio de Torres murió en su ciudad natal en 1892.

アントニオ・デ・トーレスは 1892 年に生地で没しました。



写真上から： 1. Fachada del Museo de la Guitarra. ギター博物館外観 2. El taller de Antonio de Torres. アントニオ・デ・トーレスの工場 3. El interior del Museo. 博物館内部

UN FARO PARA ILUMINAR EL INSTRUMENTO MÁS UNIVERSAL

最もユニバーサルな楽器を照らす灯台

Texto • Carlos González Marcos

文 • カルロス・ゴンサレス・マルコス

La guitarra es sin duda el instrumento musical más universal, presente en diferentes países, culturas y estilos musicales, clásicos, tradicionales y populares.

No se puede concebir la música hispanoamericana sin el sonido de charangos andinos, cuatros venezolanos, tres cubanos, jaranas y vihuelas mexicanas, etc. Y ¿cómo imaginar el flamenco sin la voz de la guitarra, o el *blues*, el *rock* y la *música country* sin las guitarras norteamericanas, sean acústicas o eléctricas?

Todos estos instrumentos son descendientes directos de las vihuelas y guitarras españolas nacidas a mediados del siglo XV, que los músicos españoles y portugueses llevaron a todos los rincones del mundo conocido. No cabe duda de que la guitarra es una de las mayores aportaciones culturales que España ha dado al mundo y en mi opinión debería ser reconocida como Patrimonio de la Humanidad.

En sus seis siglos de historia vihuelas y guitarras, que en el fondo son variaciones de un mismo tipo de instrumento, han evolucionado adaptándose al estilo musical de cada época, país o cultura, y una de esas adaptaciones tuvo lugar en Almería de la mano de un almeriense universal, Don Antonio de Torres Jurado (La Cañada de San Urbano, 1817-1892).

A mediados del siglo XIX Antonio de Torres, a la sazón residiendo y trabajando en Sevilla, recogió todos los avances que la guitarra había conocido hasta entonces y diseñó un instrumento nuevo, cuya voz embelesó a los mejores intérpretes de la época, como Julián Arcas – otro gran almeriense – o el mundialmente famoso Francisco Tárrega, entre otros muchos grandes guitarristas del siglo XIX.

El modelo de guitarra Torres eclipsó a otros modelos de guitarra, tanto en España como en el resto del mundo, y aún hoy lo sigue haciendo, ya que nuestras guitarras clásicas o flamencas siguen el patrón diseñado por el gran guitarrero almeriense.

Don Antonio de Torres es más reconocido y celebrado en el extranjero que en España. Tengo que reconocer que una de las cosas que más me sorprendió al trasladarme con mi familia a Almería en 2005, fue lo poco que se conocía a Torres entre sus paisanos. ¡Qué gran diferencia con lo que ocurre en otros países! Lo he podido comprobar por ejemplo en mis nueve viajes a Japón, donde la pasión por la guitarra española es extraordinaria.

Sin embargo, el 20 de diciembre de 2013 esta situación cambió de forma radical, gracias a la encomiable iniciativa del Ayuntamiento de Almería de poner en pie el Museo de la Guitarra Antonio de Torres Jurado, dedicado a nuestro emblemático instrumento y a la gran figura del maestro de La Cañada. Hay que señalar que es el primer museo dedicado a la guitarra que existe en España.

Mientras se aumenta la colección propia de guitarras, el Museo propone exposiciones temporales. Desde su inauguración hasta el 10 de julio presentó una exposición temporal de guitarras históricas, entre las que destacaba una guitarra barroca del siglo XVIII y una guitarra muy especial de Gerundino Fernández, de las llamadas “de formato”. Actualmente, y hasta el 10 de enero de 2015, el Museo ofrece al público una gran exposición dedicada a la Guitarra Almeriense, con instrumentos contruidos entre 1845 y 2014.

Como complemento a sus actividades El Museo de la Guitarra dispone de un laboratorio de restauración, donde también se harán labores de peritaje y evaluación de instrumentos, a disposición de particulares y coleccionistas. Y en breve se abrirá al público una Escuela de Luthería, para transmitir a quien lo desee, tenga o no experiencia previa, las técnicas del noble y complejo arte de construir instrumentos.

En su breve existencia el Museo de la Guitarra ha acogido dos concursos de guitarra, la Segunda Edición del Concurso Maty Rodríguez y la Primera Edición del Concurso Antonio de Torres. Asimismo hemos asistido a la creación de la Asociación de Amigos del Museo de la Guitarra Antonio de Torres.

He titulado este breve texto “Un faro para iluminar el instrumento más universal”, quizás inspirado por los magníficos amaneceres que contemplo desde mi casa, con el Cabo de Gata como decorado natural. Pero antes de la explosión de ocre y naranjas, en la oscuridad o tras las poco frecuentes nubes, siempre brilla intermitente la modesta luz del faro.

Un faro es orientación y protección, el Museo de la Guitarra también tiene que cumplir esas nobles funciones, indicando a los almerienses y a quienes nos visitan que en ese espacio los instrumentos estarán cuidados, explicados, y puestos en valor. Que sus frágiles cascarones que producen músicas sublimes o cotidianas, no acabarán destrozados contra las aristas de una mesa, o deteriorados por las inclemencias del tiempo, acabando a veces en el contenedor de basura.

Para quienes los conocemos bien, los instrumentos son como libros. Sus frágiles maderas nos informan de los bosques que conocieron en su etapa de árboles, los gestos de la habilidad de quien los transformó en instrumentos, las notas más tocadas por sus propietarios ... Son libros autobiográficos que narran historias de su nacimiento, su época y sus peripecias vitales. Su destrucción es una pérdida irreparable y dolorosa.

La luz de este nuevo faro, situado junto a las imponentes murallas de la Catedral de Almería, nos indica que allí se preserva algo importante y nos invita a acercarnos para conocerlo mejor, es un polo de atracción que de hecho ya ha recibido la visita de 8000 personas.

Quisiera concluir este breve texto con una noticia de última hora que considero relevante: El Museo de la Guitarra de Almería va a recibir en enero de 2015 y de la mano del maestro Jiro Yoshikawa, la donación de una guitarra de Juan Francisco Salvador Jiménez, bisnieto de Antonio de Torres. La mayoría de las guitarras del único descendiente de Torres que continuó el oficio de guitarrero se conserva en Japón y para el Museo de la Guitarra es fundamental el poder contar con una de ellas en su colección permanente.

Este generosísimo gesto de un amante y divulgador de la guitarra española, proveniente de un país tan lejano, nos llena de orgullo y alegría. Nuestra luz brilla un poco más y augura buenas perspectivas para el futuro del que es, y será aún más con la ayuda de todos, un gran museo para un gran instrumento.



Calros González Marcos

Carlos González nace en Gijón en 1954. Comienza en 1974 el estudio de la guitarra en el LIM de Gijón con el compositor-guitarrista Jorge LABROUVE. En 1979 se instala en París donde obtiene el título superior de guitarra y termina sus estudios musicales, dedicándose a la enseñanza y a su actividad como intérprete. En 1980 inicia el aprendizaje de la construcción de instrumentos con el maestro luthier Joël DUGOT, terminando el mismo en 1984. Desde entonces se dedica exclusivamente a la construcción de instrumentos antiguos en su taller de París hasta el 2000, en Córdoba entre 2000 y 2005 y en Almería desde entonces.

カルロス・ゴンサレス・マルコス

1954年ヒホン生まれ。1974年からLIM de Gijónの作曲家・ギタリストのホルヘ・ラブロウベのもとでギター研究を開始。1979年にパリに移住し、上級資格を取得、音楽研究を修了、指導と演奏活動を開始。1980年、制作家Joël DUGOT師のもとで楽器の制作を学び始める。その後、古楽器の制作に専念するようになり、2000年までパリに、2000年～2005年までコルドバに、そして2005年以降アルメリアに定住。



写真左：Foto tomada desde la casa de Carlos González Marcos. 自宅から見える Cabo de Gata の灯台の景色

右：A la izquierda Carlos González Marcos con el Bisnieto de Torres y su esposa en Tokio, 2006. 2006 年の東京の弦楽器博。カルロスとビスニエト・デ・トーレス夫妻



ギターという楽器は疑いもなく、異なった国々や文化、音楽スタイル（クラシック、トラディショナル、ポピュラー）の世界で存在する、もっともユニバーサルな楽器です。

イスパノアメリカ音楽は、アンデスのチャランゴ、ベネズエラのクアトロ、キューバのトレス、メキシコのハラーナとビウエラなどの音なしでは、想像できません。ギターの音色のないフラメンコが想像できますか？あるいは、アコースティックやエレクトリックの北アメリカのギターの音がないブルースやロック、カントリーミュージックが想像できますか？これらの楽器はすべて、15 世紀半ばに生まれたスペインギターとビウエラの末裔です。当時、スペインやポルトガルの音楽家たちが世界中の国々に持ち込み広めたものです。ギターという楽器は、スペインが世界に与えた文化的貢献の一つであることは疑いの余地がなく、私としても世界遺産として認識されるべきものだと思っています。

ビウエラとギターは、6 世紀に渡る歴史（根本的には同じタイプの楽器の変遷）の中で、それぞれの時代・国・文化の音楽スタイルに適合しながら進化してきました。そして、その最も大きな進化の一つは、アルメリア出身のアントニオ・デ・トーレス氏（ラ・カニャーダ・デ・サン・ウルパノ：1817－1892）の世界的に素晴らしい技術がアルメリアの地に花開いたことでした。

19 世紀の半ば、当時セビージャに住み仕事をしていたアントニオ・デ・トーレスは、それまでのギターの進化をすべて取り入れ、新しい楽器を設計しました。その音は、もう一人の偉大なアルメリア人であるフリアン・アルカスといった時代の良き演奏家たち、また世界的に有名なフランシスコ・タレガやその他 19 世紀の偉大なギタリストたちを魅了しました。トーレスギターのモデルは、スペイン同様その他の国々でも他のギターモデルを圧倒しました。そしてそれは今日でも続いています。なぜなら、クラシックギターやフラメンコギターは、アルメリアの偉大なギター作家により設計された型で作られているからです。アントニオ・デ・トーレス氏はスペイン国内よりも外国でよく知られ称賛されています。私が 2005 年にアルメリアへ家族と転居した時、最も驚いたことの一つは、トーレスのことが地元ではほとんど知られていなかったことです。他の国とは大きな違いです。たとえばスペインギターへの情熱が特別である日本への 9 回の旅行でもその違いを確認しました。

しかしながら 2013 年 12 月 20 日、この状況はアルメリア市役所によって根本的に変わりました。アルメリア市役所は我々の象徴的な楽器と、ラ・カニャーダの偉大なマエストロの肖像に捧げられたアントニオ・デ・トーレス・フラード博物館を設立したのです。この博物館はスペインで初めてのギターに関する博物館となりました。この博物館では、博物館固有のギターコレクションを少しずつ作っていく間、一時的な展示を行っています。開館の日から 7 月 10 日までは、当時際立っていた 18 世紀のバロックギターとヘルンディーノ・フェルナンデスの「判型」と呼ばれた特別なギターが含まれている歴史的なギターを展示しました。また現在は、2015 年の 1 月 10 日まで、1845 年から 2014 年の間に作られた楽器とともにアルメリアのギターに捧げる大展示会

を実施しています。

ギター博物館では、活動の補足として修復のための研究所を配置しています。そこでは個人や収集家のために、専門家による鑑定や楽器の評価も行います。そしてまもなく、経験のあるなしにかかわらず、希望する人に上質で複雑な楽器制作の技術を伝えるための弦楽器制作学校が開校される予定です。

ギター博物館はその開館からわずかの間に、第 2 回マティ・ロドリゲス・コンクールと第 1 回アントニオ・デ・トーレス・コンクールの 2 度のギターコンクールを催しました。同様にアントニオ・デ・トーレスギター博物館友会の会創設の手助けもしました。

私はこの文章に、「もっともユニバーサルな楽器を照らす灯台」というタイトルを付けました。おそらくそれは私の家から見える自然の姿が美しいカボ・デ・ガタ（雌猫岬）の素晴らしい夜明けから思い付いたのだと思います。朝日のまばゆい黄土色とオレンジ色の光があらわれる前、暗闇の中、あるいは時には少しの雲を通して、灯台の控えめな明かりが断続的にいつも輝きます。灯台は方向付けのものであり、安全を守るものです。ギター博物館も、アルメリアの人々や博物館を訪れる人々に、この博物館では楽器が大切に手入れされ、人々に説明され、価値を与えられる場であるということを伝え、灯台と同じように意義深い役割を遂げなければなりません。崇高なあるいは日常的な音楽を生み出す壊れやすい卵の殻のような楽器を、テーブルの角に打ち付けて壊したり、天候の過酷さにより損傷したり、ごみのコンテナに始末されたりすることのないように…。

よく理解している人々には、楽器は書物のようなものです。壊れやすい板材からは、木であった頃の森を、そして楽器に加工した人の巧みさを、また所有者に最も多く鳴らされる音を知ることができます。それらは、誕生や時代、重要なハプニングなどの歴史を語ってくれる自叙伝です。壊れることは取り返しのつかない痛ましい損失です。

この新しい灯台の明かりはアルメリアのカテドラルの威厳のある壁のそばに位置しています。ここでは貴重なものが保存されており、それらをより良く知るために人々を招き寄せています。実際すでに 8000 人が訪れた魅力的な場所です。

この短い文章を、重要な最新のニュースをもって終えたいと思います。“アルメリアのギター博物館は、2015 年 1 月に、吉川二郎先生の手から、ホアン・フランシスコ・サルバドル・ヒメネス（アントニオ・デ・トーレスのひ孫）のギターの寄贈を受けます”。ギター作家の仕事が続けたトーレスの唯一の子孫の大多数のギターは日本において保存されており、ギター博物館にとって、常設のコレクションにそれらのギターの中の 1 台を所有することはとても重要なことであります。遠く離れた国に住みながらも、スペインギターを愛し、広めようとするこの方の思いやりのある行為に、私たちの胸は喜びで満ち、とても誇らしくなりました。皆様の援助をいただきながら、私たちの光はもう少し輝きを増し、偉大な楽器のための立派な博物館となるでしょう。

日本語訳・吉川二郎



吉川二郎 よしかわじろう / Jiro Yoshikawa

1951 年、大阪生まれ。関西学院大学法学部卒。

1977 年、スペインに渡りコンサートフラメンコギターの巨匠マヌエル・カーノに師事。

1988 年、全曲オリジナルのフラメンコ曲を収録の CD アルバム『迷路』を発表。

以後、2012 年発売の『インダーロ』まで 10 枚のアルバムを発売。

1998 年、スペインで発刊された「フラメンコ大百科事典」に日本を代表するフラメンコギタリストとして紹介される。

1994 年、フレット付き卓上ハーブ「ギタルバ」を発売、楽器の研究を重ね、2010 年から演奏活動を開始。

2003 年 11 月、兵庫県川西市市民文化賞受賞。

2004 年から毎年、サラマンカ、グラナダ、コルドバ、アルメリアなどスペイン各地でコンサート活動を続けている。

ピアニスト・下山静香の 音楽の時間



「バレエ・リュス」とスペイン その 1

伝説の「バレエ・リュス（ロシア・バレエ団）」を主宰したセルゲイ・ディアギレフ。もし彼が存在しなかったとしたら、20 世紀前半における世界のアート・シーンはいささか寂しいものになっていたことだろう。天才を見つけ、結びつける天才——比類なき芸術プロデューサーだったディアギレフのもと、文学、音楽、美術、衣裳などの新しい才能が結集、バレエ・リュスは斬新な振付と舞踊で作品に命を吹き込み、「総合芸術としてのバレエ」を革新したのである。最初の大きな旋風は、まだ無名だったストラヴィンスキーの音楽によるバレエ《火の鳥》（1910 年）で巻き起こった。「バレエ・リュス」と名乗り常設カンパニーとしての活動を開始する前年のことである。この作品の大成功により、一躍時代の寵児となったストラヴィンスキーは、《ペトルーシュカ》《春の祭典》と立て続けにバレエ・リュスとのコラボ傑作を生み出すことになる。ストラヴィンスキー以外にも、ドビュッシー、ラヴェル、サティ、ミヨー、プーランク、プロコフィエフ、ピカソ、マティス、ミロ、ダリ、ローランサン、シャネルなどなど……バレエ・リュスと仕事をした音楽家、画家、デザイナーは綺羅星のごとく、豪華な顔ぶれが並ぶ。

しかし、興行は水物の宿命を逃れられない。舞台がいかに好評であっても、経済的な問題とは常に隣り合わせ。ディアギレフも何度も破産状態になっている。そして、活動の範囲が広がれば、それだけ社会情勢の影響もこうむることになる。

折しも、バレエ・リュス正式結成からわずか 3 年後、人類史上初の世界大戦が勃発した（1914 年）。ロシアも連合国側として参戦し、総動員体制となる。バレエ・リュスのメンバーのなかには無国籍移民になる者もいて、団の状態は不安定になった。しかしディアギレフは、とにかく前へと進み続ける。シーズン終わりで一旦解散したバレエ団は、1915 年、中立国スイスに拠点を移してリハーサルを続け、ディアギレフは新ダンサーの獲得と翌年からのアメリカ・ツアーなどを画策。そして、最初のアメリカ巡業（思ったほどの稼ぎとはならなかった……）の帰路、一行が向かったのは、もうひとつの中立国スペインだった。1916 年 5 月のことである。これが、ディアギレフとバレエ・リュスの、長期にわたるスペイン滞在の始まりとなった。

きっかけは、マドリード・王立劇場での公演オファーだったが、それはスペイン国王アルフォンソ 13 世〔在位 1886-1941〕の希望でもあった。ディアギレフは、オーストリア＝ハンガリーの戦争捕虜として拘束されていたニジンスキー（バレエ・リュス初期の花形ダンサー）が釈放された際、手を差し伸べてくれたアルフォンソに恩義を感じていたため、この話を喜んで受けた。この国王はまた、亡命ピアニストという立場にあったアルトゥール・ルービンシュタイン（ポーランド生まれのユダヤ人）にスペインのパスポートを発行し、演奏活動に支障が出ないよう便宜を図ったことでも知られる。芸術を心から愛し、才能ある芸術家を温かく庇護する人物だったのである。



ディアギレフ

バレエ《ラス・メニーナス》を踊った
チェルメイショワの写真

さて、スペインの首都マドリッドにやってきたバレエ・リュス。王立劇場での公演演目は、《シエラザード》《ル・カルナヴァル》《レ・シルフィード》などである。夜 10 時開演という習慣に団員たちは面食らったが、それを除けば、どこかロシアに似て親近感のあるスペインでの日々は非常に快適だったようだ。バレエ・リュスの舞台監督だった S. グリゴリエフの手による『ディアギレフ・バレエ年代記』によれば、「ディアギレフはスペインの美しさに有頂天になっていた」そうである。スペインの人々もまた、彼らを好意的に迎え入れた。

同年 8 月、バレエ・リュスはバスクのサン・セバスティアンで新作を初演する。会場は、当時の王妃の名を冠したピクトリア・エウヘニア劇場。風光明媚なサン・セバスティアンは、スペイン王室お気に入りの避暑地だった。ここで 8 月 21 日に初演されたのが、《ラス・メニーナス》と題された短い作品である。タイトルが示す通り、ベラスケスの同名絵画にインスピレーションを受けて創作されたもので、舞台装置はイタリア人画家カルロ・ソクラテ、衣裳はカタルーニャ出身の画家ジョゼ・マリア・セールであった。ベラスケスの《ラス・メニーナス》に描かれている人物によって踊られたのは、《パヴァーヌ》—— フランスの作曲家、ガブリエル・フォーレが 1887 年に作曲した、オーケストラ（オリジナルはピアノ版）と合唱のための音楽である。振付を担当し、踊り手として出演もしたレオニード・マシーンは、この高貴でメランコリックなフォーレの音楽に、ベラスケスの《ラス・メニーナス》の世界にも呼応するスペイン黄金世紀の幻影を感じとった、かもしれない。

ちなみにパヴァーヌとは、16 世紀のヨーロッパで広まった宮廷舞踊。その後、踊りは廃れたものの、音楽形式としては生き残った。パヴァーヌはスペイン起源とする説も根強く聞かれるが、ヨーロッパの流行がスペインに移入され「パパーナ」として親しまれるようになったという説が有力である。

ともあれこの作品は、特に王家の人々に気に入られ、国王にいたっては、予備公演にまで足を運ぶという惚れ込みようであった。バレエ・リュスの作品群のなかではあまり重要性が置けない小品だが、ディアギレフにとってはスペイン経験の最初の結実であり、カンパニーのレパートリーとして死ぬまで大事にしていたという。

バスクでの公演が終わると、ディアギレフやマシーンなど 10 数名を除いたバレエ団の面々は、2 度目のアメリカ巡業へ旅立った。しかし、アメリカでは団内で深刻な揉め事が起こり、散々な赤字という痛手も負ってしまい、ディアギレフ・バレエはその後二度とアメリカで公演することはなかったのだった。

一方、「バレエ・リュスとスペイン」の関係は続き、数年後に名作が誕生することになる。その話はまた、次回に。

文・写真提供 下山 静香



下山 静香 しもやま ずか / Shizuka Shimoyama

桐朋学園大学卒。文化庁派遣芸術家在外研修員としてスペインへ渡り、マドリッド、バルセロナで研鑽。スペイン各地に招かれリサイタルを行い、「スペインの心を持つピアニスト」と賞される。ラジオ、テレビ番組での演奏多数、これまでに 5 枚の CD をリリース。現在、スペイン・中南米音楽を含む多彩なレパートリーと柔軟な感性をもつピアニストとして活発な演奏活動を展開。さらに執筆・翻訳・講演・トーク・・・とマルチにこなすユニークな存在として注目を浴びている。6 冊の共著のほか、翻訳書に『サンティアゴ巡礼の歴史 伝説と奇蹟』（原書房）、校訂・解説を担当した楽譜にグラナドスピアノ作品集、アルベニスピアノ作品集（ヤマハミュージックメディア）がある。桐朋学園大学、東京大学各非常勤講師。JML 音楽研究所にて「スペイン音楽ピアノ演奏講座」開講中。

Official Web Site <http://www.h7.dion.ne.jp/~shizupf> 
裸足のピアニスト・下山静香のブログ <http://ameblo.jp/shizukamusic>

下山 静香コンサート情報 información de los conciertos

2014
12/9 (火)

下山静香スペイン・ラテンアメリカ室内楽シリーズ
第 4 回 <アンダルシアン・マジック>
ゲスト：クアルデット・エクセルシオ / 真幸操
会場：J T アートホールアフィニス

2015
3/18 (水)

下山静香リサイタル
会場：浜離宮朝日ホール 開演：13 時 30 分
朝日新聞社主催

スペインとラテンアメリカにて

最先端を行くスペイン語学校

創立 1989年

Enforex



認定校:



Instituto Cervantes
Centro Acreditado

12

スペインの
アカデミック
センター

10

スペイン、
メキシコ、
コスタリカでの
サマーキャンプ

20

ラテン
アメリカの
研修都市

32

スペインでの
大学、
ファウンデーション
プログラム

ヘッドオフィス

Alberto Aguilera, 26 | 28015 Madrid

Phone: +34 91 594 37 76

Fax: +34 91 594 51 59

E-mail: asia@enforex.es

ideal
education group

アリカンテ | バルセロナ | カディス | グラナダ | マドリッド | マラガ | マルベージャ | パンプローナ | サラマンカ | セビージャ | テネリフェ | バレンシア (スペイン)
アルゼンチン | ボリビア | コロンビア | コスタリカ | チリ | キューバ | ドミニカ共和国 | エクアドル | ガテマラ | メキシコ | ペルー (ラテンアメリカ)

Eco エコ エスパーニャ España

スペインの“エコ”を
お届けします

vol.6

タワー式太陽熱発電

写真・文章 篠田有史



アンダルシアの平原に建つタワー式太陽熱発電2号機。



1



2



3

<写真・左ページ>

1. 国道からは、3 機のタワーが見える。
2. 世界初のタワー式太陽熱発電機・1 号機。
3. 右から 1 号機、3 号機、2 号機。

<写真・右ページ>

4. 反射鏡の列の向こうには、太陽光発電のパネルが並ぶ。
5. タワーを取り囲む反射鏡。
6. 反射鏡は太陽の動きに合わせて自動制御で動く。

スペインは、知る人ぞ知る再生可能エネルギー大国である。スペインの再生可能エネルギーの全電力に占める比率は 30%で、ドイツの 22%をしのぎ、日本の 10%よりはるかに高い（2012 年の統計）。ということで、数回に渡ってスペインの再生可能エネルギーの状況を紹介することにしよう。

アンダルシアの平原に突然、巨大なタワーが姿を現す。上部からは光の筋が地上に向かって伸びている。その姿は神々しくすらある。セビリア市近郊に立つこのタワーは、アベンゴア・ソラール社の発電プラント「ソルーカル」の太陽熱発電施設である。発電の仕組みは、地上に並べられた巨大な反射鏡群が反射する太陽熱をタワー上部の一点に集め、その熱で液体（水と熔融塩を混ぜたものなど）を熱し、その液体の熱で水を水蒸気に変え、タービンを回して発電するというものだ。タワー上部から地上にのびる光の筋は、実は地上にある夥しい数の鏡が反射する光の集まったものなのだ。



4

5

6

タワー上部へはエレベーターで上ることができる。そこからは、他では見られない不思議な風景が見られる。眼下に置かれた鏡に反射する熱線が上空に伸び、熱線の向こうには近郊の町がゆらいで見える。最初のタワー（115メートル）が完成したのは2007年で、世界初のものである。現在は3機が稼働している。2号機の高さは160メートルにもなる。3号機は効率化をはかり、小型化するために建設された実験機で、その技術は海外へ輸出されている。1号機は11メガワット（5500世帯分）、2号機は20メガワット（1万世帯分）を発電している。

ここでは、タワー式の太陽熱発電以外に、古くからある太陽熱を曲面鏡で集め、その前に設置されたシリンダー内の油を熱し、その熱で発電するものや、太陽光パネルを使った発電など、いわゆる太陽エネルギーを利用した発電全般の試みがなされている。夏には道路で目玉焼きができる、と言われるセビリアならではの取り組みである。



篠田有史 ののだゆうじ / Yuji Shinoda

1954年岐阜県生まれ。フォトジャーナリスト。
24歳の時の1年間世界一周の旅で、アンダルシアの小さな町 Loja と出会い、以後、ほぼ毎年通う。その他、スペイン語圏を中心に、庶民の生活を撮り続けている。
【写真展】 スペインの小さな町で（富士フォトサロン）、遠い微笑・ニカラグア（〃）など。
【本】「ドン・キホーテの世界をゆく」（論創社）「コロンブスの夢」（新潮社）
「リゴベルタの村」（講談社）などの写真を担当。

日西商業会議所 Cámara de Comercio Hispano Japonesa

マドリードにオフィスを構える日西商業会議所(Cámara de Comercio Hispano Japonesa)は、日本とスペイン間の商業関係促進のために1954年に設立された民間団体です。会員をはじめとして顧客へのビジネスサポート、イベント開催、各種講座の開講、スペイン情報の発信、各種出版など、日本・スペイン間の理解、関係改善に向けた様々な活動をおこなっています。ここでは、日西商業会議所発行『スペイン広報』と記事の一部をご紹介します。



タラゴナの風力発電ファームの視察

去る10月10日、鈴木かつや氏率いる日本全国農業協同組合連合会NORYUKENのエネルギー部門24人のメンバーから成る代表团が、スペインで農業に应用している風力発電の状況やどのように機能しているかを知るため、タラゴナ県エル・ペレジョ市レス・コジャデテスの風力発電ファームの設備の視察を行った。

代表团はスペインでの風力発電の風力タービンの特徴や機能、得られるエネルギー、このテクノロジーの環境問題における長所等色々な側面を知ること、絶えず深い興味を示した。

近くにもう2つの風力発電ファームがある。レス・カロブレスとラ・コジャダである。この3ヶ所とも作動しており、バルセロナに本社をおくCXCはこの3ヶ所の風力発電ファームのコントロールを担当している。



30年以上風力・水力発電のプロジェクトで国内外の経験を、特にポルトガルやフランス、カボ・ベルデで持っている。

日西商業会議所がオーガナイズした視察においても、将来より環境調和型エネルギーであるよう、これらの方法での再生可能エネルギーについての情報交換の機会に恵まれた。

日西商業会議所は個人や日本企業・協会の為に、様々な分野での具体的な視察のスケジュール調整を行っており、例えば、ワインや食品、観光、再生可能エネルギー、病院・薬剤関係、農業・畜産、マスメディア等、両国の文化の違いを近づけ、それぞれのケースにおいて相応しい解決策を見つけるよう最善を尽くしている。

再生可能エネルギー関連企業協会(Asociación de Empresas de Energías Renovables-APPA)は、スペインの再生可能エネルギーの発達した技術に興味のある数々の海外代表团に行ったように、この視察のオーガナイズに全面的な協力をした。APPAは1987年に発足しており、スペインの再生可能エネルギー関連では最も歴史がある協会のひとつであり、クリーンエネルギー分野の会社や機関の間で認められている。

www.cxcrenovables.com www.appa.es



スペイン情報誌

季刊『スペイン広報』

1985年創刊の『スペイン広報』は、スペインの文化、経済をオールカラー、豊富な写真でお伝えする日本語の季刊誌。日本ではあまり知られていない地域の魅力や祭り、アートの他、奥深いスペイングルメ情報も満載。

www.camarajaponesa.es/jpn/?cat=5



お問い合わせ先

日西商業会議所 / Cámara de Comercio Hispano Japonesa

www.camarajaponesa.es/jpn

camara@camarajaponesa.es ☎ (+34) 91 851 12 11

✉ Apartado 10124 - 28080 MADRID - SPAIN



スペイン内戦が生んだ「ロバート・キャパ」(5)

キャパとタローが到着した8月5日、もっと正確に言うと、この日の午後11時頃のパルセロナの様子を、ドイツ人の社会学者でジャーナリストのフランク・ボルケナウ博士の『スペインの戦場』は、こう述べている。(川成洋『幻のオリンピック』筑摩書房、1992、p.125.)

私は教会を焼くのを見たが、それはまたしても大きな驚きであった。私は、それは暴徒が熱狂的に興奮してやったものと想像していたが、それは行政措置であることがわかったのである。焼かれている教会は大きなカタルーニャ広場の一角にあった。煙が急速に回っていた。少数のグループの人が傍らに立ち(時間は11時頃であった)、静かに見つめていた。たしかに焼くのを後悔していなかったが、そのことに非常に熱狂しているようにも見えなかった。消防隊はその場で任務につき、注意して火を教会だけに限り、周囲の建物を保護していた。また不測の事態を避けるため、誰も近くに立ち寄りなかった。そしてこの規制に対し人びとは驚くべき素直さで従っていた。もっと以前だったら、教会を焼くことはもっと興奮すべきことだったに違いない、と私は思う。

ボルケナウの目撃したのはパルセロナ市当局の反教権主義的行動の現場報告である。労働者や市井の市民のカトリック教会に対する憎悪は激しいものであったが、なぜか自制していたようである。一般的に言って、カトリック教会は王室や上流階級、さらに軍上層部と結んで、権力や富を蓄え、民衆を弾圧していたのだった。そのうえ、スペインの場合、1480年から始まったカトリックの異端審問制度が、何と1834年になって正式に廃止された。信じられないことだが、実に350年余りも続けられたのだった。異端であると告発されると自ら潔白であることを証明しなければ、刑罰として、火刑からさまざまな死刑、さらに告発された段階で財産没収といった経済刑も待ち受けていた。己の信仰の世界、あるいは心の世界に関して疑いをかけられた場合、それを完璧に反証できるであろうか。この制度がかなり恣意的に運営されていたのも容易に想像できる。何故なら、各異端審問所は独立採算制を採用していたからだった。そして、当時パルセロナ全域に広まっていた反教権主義的行動はカトリックの建造物だけに限らず、神父、修道士、修道女といったカトリック聖職者の殺害もきわめて日常茶飯事的であった。

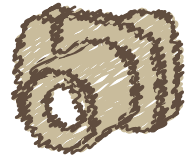
パルセロナにおいて、カテドラル(大聖堂)を除いて、58の教会は全て、程度の差こそあれ、焼け打ちにあった。聖堂の地下に埋められている墓も大々的に掘り出され、祭壇に飾られている聖像や聖画なども破壊され道路に放り出されていた。あの建築美の求道者アントニ・ガウディが設計した未完の大聖堂サグラダ・ファミリア教会にも、例外ではなく、焼き打ちされ、沢山の貴重なガソリンが浪費されたという。勿論、石づくりのサグラダ・ファミリア教会は、この焼き打ちでも、それほど損害を蒙らなかったようだ。

たとえば、イギリス人作家ジョージ・オーウェルは、彼のサグラダ・ファミリア体験について、こう率直に述べている。(ジョージ・オーウェル『カタルニア讃歌』橋口稔訳、筑摩書房、1970、p.260.)

パルセロナに来て初めて、大聖堂を見に行った。モダンな聖堂で、世にも恐ろしい建物である。銃眼模様の、ワインの瓶を逆さにしたような形の尖塔が四つある。パルセロナのほかの教会とちがって、革命の時にも破壊されなかった。その「芸術的価値」のために破壊を免れたのだ、と人々は言っていた。アナキスト軍は、尖塔と尖塔のあいだに、赤と黒の旗を吊しただけで、その建物をこわせばこわせるのに、こわさなかったとは、趣味の悪いところを見せたものである。

オーウェルの驚くべき感想である。それにしても、この建築中の教会はオーウェルが目撃した(1937年5月)後に、もっと徹底的に破壊されたのだった。現在、この建築にただ一人の日本人彫刻家として参加している外尾悦郎氏

はこう語っている。(『サグラダ・ファミリアーガウディとの対話』原書房、2011、p.50.)



ガウディの死後10年が経った頃、スペイン市民戦争が勃発しました。でも、市民戦争ではなく、むしろ非市民戦争と言い換えるべきですね。市民(civil)という言葉から文明(civilización)という言葉が生まれたにもかかわらず、人々はこの戦争で文化や文明を破壊したのですから。ともかく、ガウディが残した図面はこのときすべて焼失してしまいました。まさに悲劇です。(中略)ガウディはカタルーニャ人で、かつカトリック教徒でした。聖堂を攻撃したのも、やはりカタルーニャ人です。人民戦線側にとって、敵であるフランコ將軍と密接な関係にあるカトリック教会は「憎むべき対象」でした。そういう非常に複雑な事情から、サグラダ・ファミリアは徹底的に破壊されたのです。

キャパとタローは、労働者革命の真っ只中のパルセロナ市内を散策する。大企業、外国人用の大型ホテルなどがすでに「反ファシスト民兵委員会」に接収され、前代未聞の都市を実際に体験して満足したであろう。当時のパルセロナ市内で最大の政治勢力はアナルコ・サンディカリストの全国組織の労働組合である全国労働連合(CNT)とその上部政党であるイベリア・アナキスト連盟(FAI)、次いでスターリニスト共産主義に反対しトロツキズム寄りの共産主義政党で、パルセロナを本拠にするマルクス主義統一労働者党(POUM)、それに社会主義者と共産主義者の連合を公然と標榜しているが、共産主義者が主導権を握り、スペイン共産党(PCE)と陰で連帯しているカタルーニャ統一社会党(PSUC)、である。これらの3つの労働者組織や政党が、すでに述べたように、7月17日のスペイン正規軍の軍事叛乱の翌日以降に、それぞれ「民兵隊」を組織し、市井の市民とともに、果敢に武力抵抗するだけでなく速やかに叛乱軍を鎮圧したのだった。

実際の戦闘場面取材したいと思っているキャパとタローは、パルセロナから最寄りの最前線であるアラゴン戦線に自治政府の公用車で向かう。アラゴン戦線は膠着状態であった。別言すれば、のんびりとした前戦だった。時々銃弾が飛び交い小競り合いも生じるが、それらは決まって夜間に発生し、従って写真撮影は無理だった。この辺一帯に布陣していたのは、パルセロナから派遣されたPOUM民兵隊、それにもう一つの民兵隊であった。

この民兵隊について具体的に述べると、パルセロナの陸軍駐屯地での軍事蜂起が起った日(7月18日)は、バプロ・カザルス音楽総監督のもとでベートーベン『第九』の最終リハーサルの日であり、その2日後の20日からナチス・ドイツのオリンピックに対抗する「パルセロナ人民オリンピック」が開催されることになっていた。それには、スペイン内外から6000人の選手がすでにエントリーしていた。中止の報を受け、またパルセロナ市内の混乱と戦闘を目の当たりにして、例えば、イギリス人選手団の身辺保護と帰国を確保するために、急遽、イギリス艦隊がジブラルタル経由でパルセロナに入港する。ところが、帰国できない選手団もいた、ドイツ人たちである。彼らは、ドイツ人革命家を冠した「テルマン・セントウリア」という民兵隊を編成していた。こうした民兵隊が基盤となって、後に歴史にその名を残すことになった「国際旅団」が誕生したのである(川成洋、前掲書)。それにしても、果たせるかなというべきか、彼らは、即席の素人武装集団であり、きまった軍服はなく、銃や軍装備も旧式であり、これではキャパとタローの不倶戴天の敵であるファシスト軍、とりわけ軍事大国ナチス・ドイツ軍と互角に戦えまいと判断したのだった。ここで1週間、きわめてスペイン的な、陽気なというべきか、アラゴン戦線での撮影も終わり、叛乱軍の重圧に喘ぎながらも、あの有名なスローガン「ノー・バザラン(奴らを通すな)！」が叫ばれているスペインの首都、やがて「世界の首都」マドリッドへ向かうことになる。(続く)

文 川成洋



川成洋 かわりよう / Yo Kawanari

1942年札幌で生まれる。北海道大学文学部卒業。東京大学大学院修士課程修了。社会学博士(一橋大学)。法政大学名誉教授。スペイン現代史学会会長、武道家(合気道6段、杖道3段、居合道4段)。書評家。主要著書:『青春のスペイン戦争』(中公新書)、『スペイン未完の現代史』(彩流社)、『スペインー歴史の旅』(人間社)、『ジャック白井と国際旅団ースペイン内戦を戦った日本人』(中公文庫)ほか。

Un samurái dividido que une cinco países

Gonzalo Robledo



Como el “Visconde demediado” de la novela homónima de Italo Calvino, el samurái Hasekura Tsunenaga fue dividido en cinco partes iguales para conveniencia de los países latinos incluidos en su viaje interoceánico de hace 400 años conocido como la Embajada Keicho.

Diplomáticos, funcionarios y académicos de México, Cuba, España, Francia e Italia lo describen con todo derecho como “el primer samurái en pisar nuestro suelo” y en sus celebraciones y recordatorios, que se iniciaron en 2013, exaltan orgullosos la etapa del recorrido que les correspondió.

La travesía de Hasekura, entre 1613 y 1620 (incluidos dos años en Filipinas antes de su retorno a Sendai), fue un periplo involuntario que se inició a bordo de un galeón hecho en Japón y continuó en barcos españoles, carretas, caballos y a pie.

La comitiva fue recibida por altos funcionarios y prelados franciscanos y alojada en estancias exclusivas donde el menú incluyó lo que para los expertos emisarios japoneses debieron ser los más extraños alimentos que probaran en sus vidas.

Los tramos entre ciudades, a lomo de caballo o mula, fueron expediciones de temperaturas extremas, posaderas doloridas y comidas de emergencia con ingredientes aún más raros.

México se enorgullece de haber sido el lugar donde la comitiva de Hasekura entra en contacto con la cultura hispana y abraza el cristianismo para facilitar las relaciones comerciales.

También en México tiene lugar la primera descripción de los japoneses en un idioma americano, escrita en lengua náhuatl por el cronista indígena Chimalpahin.

Cuba compensa la brevedad de la estancia con un monumento cuya leyenda recuerda que desde la Habana hay “8.700 kilómetros hasta Roma y 11.850 kilómetros hasta Sendai”.

En España, el núcleo político de la ruta, la embajada Keicho es recibida inicialmente con gran pompa y derroche según consta en las abultadas facturas que computaban aterrados funcionarios y franciscanos.

En honor del rey Felipe III y del Duque de Lerma (Francisco Gómez de Sandoval) -su contacto principal en la corte-, Hasekura se bautiza en Madrid como Felipe Francisco Hasekura. Por una curiosa casualidad el apelativo cristiano del samurái reúne los nombres del actual monarca español y del primer papa latinoamericano en la historia del Vaticano.

La fragata que lo lleva a Italia se refugia de un temporal en Saint Tropez (Francia) y allí la delegación tiene el tiempo suficiente para dejar en los archivos locales un pintoresco episodio que figura además en los anales del pañuelo desechable Kleenex: “... se suenan la nariz con pequeños papeles suaves y sedosos que nunca usan dos veces. Los tiran después de usarlos y les divierte ver como nuestra gente se apresura a recogerlos”.

El fastuoso recibimiento de Hasekura en el Vaticano es el mejor documentado visualmente. En la Sala Regia de Quirinal se puede ver un mural que describe la audiencia con el papa y es un cura italiano, Scipione Amati, quien escribe la más exhaustiva crónica sobre el recorrido europeo del samurái y sus hombres.

Aunque los historiadores modernos enfatizan el fracaso en establecer relaciones comerciales y en expandir el cristianismo en Japón, el heroísmo de Hasekura radica en su firmeza.

El samurái no duda en embarcarse en un viaje transoceánico a bordo del primer galeón interoceánico construido en Japón. Hoy, esto equivaldría a viajar a una galaxia desconocida subido en el primer cohete fabricado en un país que tiene algunos aviadores pero ningún astronauta.

Hasekura se mantuvo inamovible en su credo cristiano pese a que cuando regresó a Japón su país había proscrito las religiones cristianas y aplicaba con frecuencia la pena de muerte a los bautizados.

Sus últimos días, hasta su fallecimiento en 1622, quedaron difuminados en

leyendas y rumores y quien quiera hoy rendirle homenaje visitando su sepultura tiene que desplazarse al menos a tres tumbas distintas.

En 1980 una novela llamada “El samurái”, escrita por Shuzaku Endo, uno de los escritores japoneses más conocidos del siglo pasado, relata en clave ficticia la ruta de Hasekura.

“El samurái” es una historia trágica de personajes taciturnos o soberbios y, a mi modo de ver, una de las mejores indagaciones literarias dentro del alma nipona y sobre cómo los japoneses manejan y comunican sus sentimientos.

Endo explica que en el siglo XVII Japón “estaba a punto de ser arrastrado al complejo y peligroso vórtice de la política internacional”. Ieyasu, afirma el autor, planeaba entrar en el conflicto expansionista que desarrollaban en el Pacífico naciones católicas y protestantes europeas y la misión diplomática japonesa no pasó de ser un preparativo truncado.

Gracias a Endo millones de personas en todo el mundo conocimos una odisea que había permanecido oculta o acallada por la política japonesa del sakoku o cerrazón del país.

Se cuenta que en la segunda mitad del siglo XIX diplomáticos japoneses que visitaban Italia recibieron noticia de la misión Keicho.

Por esa misma época, en 1859, la carta que Date Masamune dirigió a la ciudad de Sevilla fue hallada en el ayuntamiento de la capital andaluza.

Un miembro del archivo municipal sevillano de la época cuenta que la esplendorosa carta estaba “dentro de un canuto de lata enmohecida en un armario donde se hacinaban planos, planchas de cobre y medidas de capacidad”.

En 1992 para el quinto centenario del descubrimiento de América, la carta fue exhibida como evidencia del papel de “puerta universal de Europa” que jugó en su momento Sevilla.

Animado quizás por su ascendencia japonesa, el escritor peruano Fernando Iwasaki buscó esperanzado grandes hazañas en la aventura de Hasekura. Pero, abrumado por la sucesión de intrigas, fracasos y rutas erráticas que halló en su investigación terminó calificando la misión de “estrambótica embajada”.

La decepción de Iwasaki no llegó a afectar el tono de las celebraciones de los 400 años de 2013-2014 que se tornaron en un merecido agradecimiento al estoico samurái por haber protagonizado un segmento de historia que hoy permite a más de 400 millones de personas de cuatro idiomas distintos sentarse a hablar de viejos lazos comunes.

Coria del Río, con sus centenares de ciudadanos apellidados “Japón”, recibió la visita del príncipe heredero Naruhito en 2013, en el primer reconocimiento oficial a un linaje que se remonta a los miembros de la comitiva de Hasekura que se quedaron a vivir en ese antiguo puerto aduanero del Guadalquivir.

Científicos japoneses anunciaron una investigación de ADN para confirmar los ancestros nipones de Coria donde los casos de “mancha mongólica” en los recién nacidos evidencian con cierta frecuencia que la sangre nipona sigue corriendo por sus venas.

La conmemoración de los 400 años del viaje de Hasekura, seguirá en 2015 en Francia e Italia.

Autores de ficción y académicos han publicado libros sobre el tema y es muy probable que, como sucede con muchas aventuras históricas con escenarios variados, se produzcan películas, animaciones, manga y hasta videojuegos.

Los más románticos soñamos con que algún sedoso investigador encuentre los diarios de Hasekura y podamos leer la descripción de su encuentro, hipotético por ahora, con Cervantes y El Greco en Toledo.

Hasekura sigue inspirando a los países de su ruta con una aventura que cada año gana en detalles y validez, permitiendo que la memoria del samurái descanse, dividida pero satisfecha, en cualquiera de sus tumbas.

Gonzalo Robledo



Gonzalo Robledo ゴンサロ・ロブレド

1958年南米コロンビア、ベレイラ生まれのジャーナリスト／プロデューサー。1981年より東京在住。これまでにスペインの全国紙エル・パイス（El País）通信員、RTVE スペイン国営テレビジョン通信員、そしてEFE スペイン通信社東京支局員を務める。TVE、テレマドリッド、カナル・スール、EFE-TV、カナル・クアトロ等、スペイン語圏の各テレビ局向けに、ルポタージュやドキュメンタリーなど、数々のTV番組の脚本・制作・演出を手掛ける一方、日本でも、NHKテレビ、関西テレビ、映画制作会社「エクセレント・フィルム」向けに番組を制作。日本では、アサヒグラフ（朝日新聞社）、毎日グラフ（毎日新聞）、コモンセンス（教育社）、カーグラフィック、ナビ（二社）、フォーカス（新潮社）等、多数の雑誌に写真・記事を掲載。スペインでは、日本及び日本文化に関する記事を GEO、Altair、Islas、Lonely Planetなどの雑誌に掲載。

Descubrir Japón

Japón

日本とわたし

y yo

「日本に住むスペイン人による日本発見記」

▶ autor / 今回の寄稿者



Antonio Gil de Carrasco

アントニオ・ヒル・デ・カラスコ

Nació en Granada en 1954. Escritor y periodista. Doctor en Letras, Licenciado en Filosofía y Letras, Diplomado en Educación General Básica. Actual Director del Instituto Cervantes de Tokio.

1954年グラナダ生まれ。作家、ジャーナリスト。文学博士。哲文学部卒業。教職課程履修。セルバンテス文化センター東京(日本)現館長。

■ Las clases de japonés 日本語レッスン

A pesar de saber que el japonés es un idioma difícilísimo, totalmente distinto al nuestro y con tres sistemas de escritura diferentes, no por ello iba a renunciar a mi afán de aprender el idioma de los países donde he sido destinado y así desde el verano, antes de incorporarme a Japón, comencé con mis estudios de japonés. En Dúrcal por mi cuenta y en Tokio con una profesora particular bastante peculiar con quien debido a las diferencias idiomáticas y su escaso inglés, se han dado situaciones muy cómicas. Así un día comenzamos a hablar de comidas y me preguntó qué comida me gustaba de Japón, a lo que yo contesté que el sushi. Después le pregunté yo que si le gustaba la comida española y contestó textualmente "Ano ... choto", yo me dije ¿el culo del choto?, pero qué raritos son estos japoneses, sin embargo poco después descubrí que 'ano', significa "esto", y 'choto' significa "un poco", así que lo que la buena señora me quería decir es que nuestra comida le gustaba solo un poco.

Con la pronunciación de la R por la L, me ocurrieron también situaciones cómicas, pues no es que no sepan pronunciar la R, sino que ellos la interpretan como L cuando les parece, porque en algunos casos la pronuncian perfectamente. Así que estábamos hablando de la siguiente clase y ella me decía 'Lai shu', y yo creía que me estaba hablando de algún templo sintoísta o del Dalai Lama y tras muchas vicisitudes me di cuenta de que decía lo que para mí era 'Rai shu', es decir la semana próxima (Rai: próxima, Shu: semana).

Me decía también que el "turuco" me causaba interferencias en mi aprendizaje y por más vueltas que le daba, no sabía a que "truco" se refería, hasta que deduje que se refería al idioma turco, o cuando me decía que iba a ir a "Madorido", en escritura katakana y tras mucho investigar averigüé que quería decir Madrid. Y es que el japonés, sobre todo la escritura, tiene esas cosas, ya que era un idioma silábico y cuando adoptaron la escritura de los chinos, no supieron adaptar al cien por cien la plasmación gráfica de todos sus sonidos. Así por ejemplo Cervantes, se escribe textualmente "Seruvantes", Granada, "Guranada" o Spain, España en inglés, se escribe "Supein".

Con su nivel de inglés también ocurrieron situaciones cómicas, pues tras varias semanas de clase me dijo: 'watachi tachi freno'. Y yo alucinaba pues 'watachi tachi' significa en japonés, nosotros, pero 'freno', según ella una palabra inglesa, no sabía lo que quería decir, pensaba que quería poner "freno" a las clases, hasta que averigüé que quería decir 'friends', es decir, quería decirme que ahora éramos "amigos".

La verdad es que comienzo a estar mayor para estos malos ratos, pero nada de esto me detendrá en mi afán de aprender esta lengua tan extraña, y antes de dejar este país espero ser capaz de poder comunicarme.

日本語が難しい言語だとは存じておりましたが、スペイン語と全く異なり、文字も3種類もある…今回ばかりはどうかと思いましたが、赴任先の言語をマスターすることを信条としている私にとって、言語習得の情熱が消えることはありません。日本語は日本に赴任する前、2012年の夏から始めました。デウルカル(グラナダ)では自主学习、東京では個性の強い先生方から個人レッスンを受けています。言語の違いから、授業中とても面白い場面に何度か遭遇しました。ある日授業で食べ物テーマにした時のことです。先生が私に「日本料理は何が好きですか?」と聞くので「寿司」と答えました。その後、今度は私が「スペイン料理はお好きですか?」と聞きました。すると彼女は日本語で「あの…ちょっと」と答えるではありませんか。私はそれを「エル・クロ・デ・チョット?(子ヤギの尻)」と勘違いし、日本人はなんて不思議な人たちなんだろうと思いました。その後すぐに「ano」は肛門ではなく「あの…」を意味し「choto」は「少し」であることを知りました。以上のことから、先生はスペイン料理が苦手…と言いたかったのです。

RとLの発音の違いからも面白いことが何度かありました。よく言われるように日本人はRの発音が出来ないのではなく、Lのように聞こえた際にはそのように解釈するということなのです。なぜなら時々、日本人でもLを完璧に発音するからです。ある日次回の授業について話していた時、先生が私に「LAI SHU」と言うので、私はどこかの神社の話か、はたまたダライ・ラマの話かと思いました。そして、理解するのに大変苦労しましたが、最終的に彼女は「RAI SHU」と言っていたのだと気づきました。要するに、来週ということです(Rai=次、Shu=週)。

また「turuco(コツ)」と言われた時には、先生は私の学習のコツが日本語の勉強の邪魔になると言っているのかと思いましたが、何度も質問を繰り返すうちに、トルコ語のことを言っているのだと気づきました。また先生がカタカナ発音で「Madorido(マドリード)」へ行くと行った時には、散々調べ回った末、それがMadrid(マドリード)であるとわかった次第です。日本語は、特に文字を書く際にこのような勘違いが頻繁に起こります。なぜかと言うと、日本語は母音言語であり、中国から文字を取り入れた際に全ての音を適用出来なかったためです。そのため、例えば、CervantesはSeruvantes、GranadaはGuranada、Spain(英語)はSupeinとなります。

先生は英語があまり堪能でないことから面白い場面が生まれました。先生はいつも「watachi tachi freno」と私に繰り返していましたが、私にはなんのことかわかりませんでした。「watachi tachi」は日本語で「私たち」を意味します。「freno」は…彼女によると英単語だということです。それが「friends」を意味しているのだと分かるまで、先生は「freno(ブレーキ)」を教室に置きたいのだろうか、と思っておりました。先生はつまり、私たちは友達だと言いたかったのです。

けれどこのような勘違いがあったからといって、未知の言語を学ぼうという私の熱意がなくなることはありません。そして、日本を去るまでには日本語で会話が出来ようになりたいと思っています。

■ La visita a Parque España バルケ・エスパーニャ訪問

Hace unos meses fuimos a Parque España, un parque temático al estilo de Eurodisney que está cerca de Osaka, pero que tiene a España como marco de referencia y en donde las reproducciones de la Puerta de Alcalá, la Plaza Mayor de Madrid, el Palacio de Aranjuez, la Giralda de Sevilla o la Puerta de la Justicia de Granada, entre otras, son absolutamente increíbles, y todo ello rodeado de las atracciones mas impresionantes entre las que destaca una espectacular montaña rusa que te pone boca abajo gran parte del trayecto.

Asistimos a un desfile en el que participaron grupos de gigantes y cabezudos, flamencos y payasos que me hicieron sentir que estaba en el Corpus de Granada o en el desfile de carrozas de San Ramón cuando pasa por el Barrio Bajo en Dúrcal.

Pero lo que me llegó al corazón fue el detalle del presidente de Parque España que nos había invitado a visitarlo, al llevarnos al final de la visita a una de las tiendas que tienen y poder comprar polvorones y tortas de Inés Rosales en el centro de Japón.

Al día siguiente por la mañana nos llevaron a la isla de Mikimoto, donde se inventó la producción de perlas cultivadas y donde se producen las de mayor calidad en el mundo. Asistimos a la demostración de tres buceadoras japonesas bajando a coger las ostras a 15 metros de profundidad en unas aguas gélidas, a una temperatura de 14 grados centígrados. Nos explicaron que iban vestidas de blanco pues ese color espanta a los tiburones, y el hecho de que fuesen mujeres y no hombres, se debía a que las mujeres tienen menos grasa y aguantan más bajo el agua. La impresión es que esas mujeres son de acero.

A primera hora de la tarde, nos llevaron a visitar el Santuario de Ise, uno de los templos sintoístas mas antiguo e importante del país, y quedamos extasiados ante tanta paz; tranquilidad y belleza. El silencio del lugar, la perfecta armonía con su entorno natural, la austeridad de una arquitectura regida por la simetría, el respeto que se respira, todo ello convierte al lugar en un recinto de paz, sin que uno crea, se podría decir que purifica la visita a Santuario de Ise. Pude rezar allí con el Director de Parque España porque soy de los que creen que todos los caminos llevan a Dios.

A última hora de la tarde, volvimos en el Tren Bala a Tokio, pensando en la maravilla que es Parque España y en qué hacer para que todos los japoneses lo conozcan y lo visiten, lo cual me llevó al proverbio de Confucio que dice: "Cada cosa tiene su belleza, pero no todos pueden verla". Hagamos que ese proverbio no se cumpla y visitemos Parque España, tendrán ustedes la sensación de estar en mi país.

Antonio Gil de Carrasco
Director del Instituto Cervantes de Tokio

数ヶ月前、私どもは志摩スペイン村を訪れました。このテーマパークは紀伊半島三重県にあり、文字通りスペインをテーマとしています。園内にはアルカラ門やマドリードのマヨール広場、アランフェス宮殿、セビリアのヒラルダの塔、グラナダスの門などの複製がありますが、本当に素晴らしいものです。それらが堂々たるアトラクションに囲まれているのです。数あるアトラクションの中でもとびきり印象的だったのはジェットコースターで、乗っている間はずっと顔をふせていないといけないほどの迫力でした。

また、私たちは園内のパレードに参加しました。巨大な人形や大きなかぶりもの人形、フラメンコにビエロたち。私はグラナダのコルプス（聖体のお祝い）やデウルカルのダウンタウンを通り過ぎるサン・ラモンの馬車のパレードの中にいるかのように感じました。

特に私の心に響いたのが、ご招待いただいた志摩スペイン村の社長様のお心づかいです。彼は最後に私たちを園内のショップに案内してくれたのですが、そこでは、この日本の真ん中で、なんとイネス・ロサレスのボルボロンとトルタ（スペイン伝統のお菓子）を買うことが出来るのです。

翌日は、真珠の養殖を発明し世界中の高品質な真珠を生産するミキモト真珠島にご案内いただきました。そこでは3名の海女の方々が14℃という冷たい水の中に15mの深さまで潜って真珠をとる実演を拝見しました。説明によると海女の白い磯着はサメが驚く色であること、男性より女性の方が脂肪が少なく、より深い海底に耐えられるということを知りました。この女性の強さには本当に感銘を受けました。

午後は、日本で最も古く重要な神社のひとつである伊勢神宮に連れて行っていただきました。私たちはその平和さ、静寂、美しさの前に恍惚感をも覚えました。土地の静けさ、自然との完璧なる調和、シンメトリーで律された建築のもつ厳格さ、敬意の念、全てがこの地の平和となり、間違いなく伊勢神宮への訪問を清いものにしてくれるでしょう。私は全ての道は神へ続くと思っておりますから、志摩スペイン村のディレクターの方と共に伊勢神宮へ祈りを捧げました。

夕方、帰りの新幹線の中で素晴らしい旅を振り返り、日本の全ての皆さんに志摩スペイン村を訪れていただくにはどうしたらいいかと考えていると、ふと「全てのものが美しさを備えているが、誰もがそれに気付くわけではない」という孔子の言葉を思い出しました。とはいえこの格言のようにではなく、ぜひ多くの方々に志摩スペイン村を訪ねていただきたいと思います。まるで私の母国スペインにいたるよう感じられることは間違いありません。

アントニオ・ヒル・デ・カラスコ
セルバンテス文化センター東京館長



1

2

3

4

5

1. Procesión en Parque España.
志摩スペイン村パレードの様子
2. Antonio, María Ángeles, Beatriz y Juan Pedro
en el Café Cantante del Parque España.
アントニオ、マリア・アンヘレス、ベアトリスとフアン・ペドロ、
志摩スペイン村内カフェカンタンデにて
3. Antonio Gil frente a una réplica de la Puerta de las Granadas.
アントニオ・ヒル、グラナダスの門のレプリカの前にて
4. Antonio y María Ángeles frente a una réplica de
la Plaza Mayor y la Cibeles de Madrid en Parque España.
アントニオとマリア・アンヘレス、
志摩スペイン村内のマヨール広場とシベレスのレプリカの前にて
5. Antonio Gil con los distintos tipos de Sake del Santuario de Ise.
アントニオ・ヒル、伊勢神宮の奉納酒樽の前にて



スペインフェア2015

協賛者募集のお知らせ

毎年大勢の来場客でにぎわうスペインフェア。来年2015年も開催決定！
一緒にスペイン文化の発信を盛り上げてくれる仲間を募集します。

スペインフェア 概要	<2015年11月14日(土) 西宮にて開催> 様々な面を持つスペインという国を紹介するイベント。スペインの文化(アートやダンス、映画、スペイン関連の講演会等)の紹介や、スペイン語の書籍・雑貨の展示販売、スペインの食べ物や飲み物の販売等を通して、関西のスペイン愛好家に、スペインに関わる様々な企業や試みの存在を紹介するためにスタートいたしました。
協賛者募集	「スペインフェア」は、毎年たくさんの関西のスペイン愛好家にご来場いただいております。スペインの文化紹介やスペイン関連商品の販売など、スペインに関する企業様の宣伝に役立てていただける絶好の機会です。 <具体的には> 会場でスタンドを設置し、商品の展示や販売、フライヤー等の配布、宣伝活動にお使いいただけます。またプログラムに講演やセミナーの時間を設けることもできます。 <協賛特典> 会場でのチラシ設置・PRや、ホームページやスペイン情報誌acueductoへの広告・協賛者名・ロゴの掲載等。 ※その他の協賛方法にも柔軟に対応
会場への 広告設置募集	スペインに興味をお持ちの来場者の方に貴店の宣伝をしませんか?会場内には情報コーナーを設け、色々なチラシを設置します。スペインに関する情報をお探しの方に知ってもらえるチャンスです。

スペインフェア2014の様子



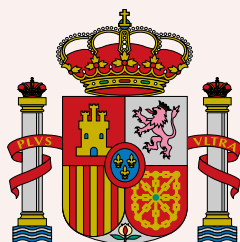
京都外国語大学で行われた2014年のスペインフェア。会場では、大きな鍋で作る本場のパエリアや生ハムが大人気。スペインのビールやワインも豊富に取り揃え、スペインの食を満喫。またスペインタイルのワークショップや毎年恒例のスペイン関連書籍の販売コーナーも盛況でした。一方、構内の講堂では、関西の人気フラメンコ教室が集まり、フラメンコショーを開催。フラメンコギターの音色と力強い踊りが会場を盛り上げました。

お問合せ：有限会社ADELANTE

大阪市北区梅田2-5-8千代田ビル西別館2F TEL:06-6346-5554
www.spainfair.jp



Asociación Cultural Española
スペイン文化協会



在関西スペイン人 との交流懇親会

2014 年 10 月 17 日夜尼崎市内のホテルで、関西日本スペイン協会主催の恒例の交流懇親会が行われた。参加者は 100 余名で、今年はスペイン人の人たちの参加が例年より多かったように思えた。家族連れ、若いカップル、留学生、語学講師、ビジネスパーソンなどさまざまな立場の人たちが一堂に会し、グラスを傾けながら賑やかにおしゃべりに興じた。筆者も今年で 3 回目の参加で、各方面のスペイン人や日本人の方々とお会いして談笑するのをいつも楽しみにしている。

冒頭辻井会長が挨拶の中で、協会の事務局を担っておられる近畿日本鉄道（株）運営の 1994 年開業 “Parque España”（2011 年 11 月の本誌 “acueducto” 第 7 号の特集記事でも紹介された）が、スペイン政府から “Marca España” 普及への貢献が評価され表彰を受けた旨披露された。また、去る 9 月に着任されたばかりの Sergio Colina 新領事が乾杯の音頭を取られ、日西交流 400 周年の “Año Dual” に当たる年に日本に來られたことを光榮に思い、日西の絆強化に尽力したい、と抱負を述べられた。

懇親会はいつも飲物・食べ物がたっぷり、ひと通り胃袋が満たされると、余興が始まり、ギターとフラメンコ、それに歌と踊りも加わり、みんな飛び入りで気儘で陽気に愉快的雰囲気づくりに一役買った。関西地区ではこのような私的な交流・親善の場が本当に少ないので、参加者は思う存分楽しいひと時を過ごすことができた。おしゃべりや余興をエンジョイしているうちに 2 時間ほどの懇親会は終わりを告げ、名残惜しい思いで会場を後にした。

伊藤嘉太郎



懇親会の様子。フラメンコギターの音色と陽気な歌声で会場は大盛り上がりだった。

スペインのお勧め
パール・レストラン
bares y restaurantes recomendables

Vol. 9
MECHELA (メチェラ)
／ Sevilla

セビージャの中心部近くにある隠れ家的レストラン「メチェラ」。セビージャで現在最も人気のあるレストランの 1 つと言われ毎日混み合っていると噂だ。若手シェフ・アルバロ氏自身の ABUELA (アブエラ／祖母) から引き継がれたメニュー、伝統にインターナショナルなテイストが加えられた料理が、ちょっと大きめのタパスサイズにてサーブされるのが嬉しい。固定メニューとは別に、アンダルシアの季節食材を大いに利用した日替わりメニューも複数あり大いに楽しめる。もちろん大皿の場合もあるので確認してから注文しよう。店内はお洒落な女性客が多く目に映り、気軽に足を運べるカジュアルレストランである。給仕女性達の素早く丁寧なサービスも心地よく、和やかな雰囲気包まれ非常に心地よい空間だ。ワインはほぼ全種グラスで頼むことができるので料理ごとに変えて楽しむのもいいだろう。味もその雰囲気もセビージャの最先端を感じたい方にはぴったり！そして地元にとっぴりと浸かりたい人向けのレストラン。手作りデザートも秀逸なので別腹の用意も忘れずに！デザートとコーヒーまで満喫して予算は 1 人 20 から 30 ユーロ程度。早めに行って席の確保をするのは必須であろう。



田中富子 たなかとみこ / Tomiko Tanaka

日本にてフォワード・米通信機会社勤務後、2001 年よりセビージャ在住。2006 年個人自営業ビザ獲得。2008 年アンダルシア州立ハエン大学にてバジーン・オリーブオイル・ティスターにおける大学のエキスパートコースを終了し、オリーブオイル・エキスパートに。現在は、オリーブオイルコース、食品輸出入仲介業と執筆業を主に、通訳、翻訳等スペインと日本を橋渡し中。誠実、情熱、感動がモットーの熱い人間です。HP: www.creapasion.com / <http://spain.fc2web.com/>



写真上、PARGO A LA ROTENA (ロタ風地中海鯛) は、季節限定メニュー。19 ユーロ／左下、AJOBLANCO CON GAMBÓN Y HUEVAS DE ARENQUE (大エビと数の子のアホブランコ (ニンニクとアーモンドのスープ) は、そのまったり感と揚げエビのうま味がたまらない。4,20 ユーロ／右下、TARTA DE CHOCOLATE (チョコレートケーキ) は大人気デザート。4,5 ユーロ

información

MECHELA (メチェラ)

住所: Bailén, 34, SEVILLA 電話: +34 955 28 94 93
HP: <http://www.mechelarestaurante.es/>

※上記情報は、2014 年 11 月時点のもので変更する可能性があります。



マドリッド在住 15 年
旬のスペイン情報をお届けします

スペイン小橋 ①



2 年後のマドリッドにさらに期待

長年日本人観光客の間で、治安が悪いから自由行動も落ち着いてできないと言われ続けてきたマドリッドは、この 15 年の間に大きく変容してきました。街角や地下鉄構内の警備が増え、主だった道や観光箇所には日本語での案内看板が立ち、日本語通訳者まで揃える警察署まで準備されるようになって、スペインを訪れる観光客の 1% にも満たない日本人観光客がマドリッドから大切にされていることが目にとってわかるようになりました。観光案内所には日本語の案内が貼られています。数年前まではちょっと危なげな気配がしたフエンカル通りやソル広場から伸びるアレナル通りは歩行者天国となり落ちついてショッピングを楽しめるようになりました。

そんな訪問者に優しいマドリッドがここ数年ちょっと元気ないように感じます。

私がスペインという国に一番最初に対面したのは、ベドロ・アルモドバル監督作品「バチ当たり修道院の最期 (1983 年)」という映画を観た時でした。スペインはおろか日本以外の国に関する知識が皆無だった 10 代の私にはやや刺激が強すぎる内容だったのに加えて、文化・社会的背景も知らず、とにかく作品の意味がまったくわからない。そ

れでもまるで頭を強くぶつけた後のように見終わった後から強い痛みと興奮がじんじんとやってくるような、そんな感覚が長い間残ったのを覚えています。今のマドリッドには 80 年代にアルモドバルが強烈な個性で世界に放ったような存在感、説明できない興奮、迫力が不足しているように思えるのです。

私の中のスペインとは、洗練しきれいていないけれどカラフルで独特の毒気があり、近づく人を皆虜にしてしまうような色気を纏った国。そんなイメージでしたが EU 統一後、不要なまでに強いられた横並び政策のせいか、隣国ヨーロッパ諸国風のデザインが流入し、世間ではミニマリズムのシンプルさがもてはやされ、お上品になりすぎてしまったのです。そんな不満を抱いていたところ、9 月 12 日、雇用・観光文化省アナ・イサベル・モリーニョ大臣がペルーにて開催された世界観光サミット開催中に日本の大手旅行会社の会長と会談、日本の旅行会社の協力の下、2016 年を目処に日本人観光客のマドリッド滞在日数を 1 日から 7 日までに引き伸ばすためのアラカルトプログラムを仕掛けていくというニュースを目にしました。女優菊池凛子さんを日本語ナレーションに起用しているバルセロナの最新版プロモーションに対抗するのに、マドリッドはどんな仕掛けで驚かせてくれるのかしらと一人想像してわくわくしています。また 2015 年 4 月

にはマドリッドにて世界観光サミットが開催されます。それを皮切りにマドリッドが世界に注目されれば、ちりちり燃っていたマドリッド復活戦にも火が点る、そんな予感がしてこれからのマドリッドから目が離せなくなりそうです。



マジョール広場。いつも大道芸人やミュージシャンがいて、観光客や地元の人で賑わう広場を一層魅力的な空間にしています。



土屋寛子 つちやひろこ / Hiroko Tsuchiya
マドリッドに 15 年在住。仕事のビザで渡西、日系企業に勤務。スペイン人の夫と 4 歳の娘と暮らしている。

西宮市国際交流協会

スペイン語 おしゃべりの会

活動報告 2014.10.5

今回の
テーマ

Alicante, mediterráneamente
(地中海そのものの町 Alicante)

今回のスペイン語おしゃべりの会は 10 月 5 日、台風 18 号の影響が心配される中での開催でした。それでも定員 30 名が満席となり、スペイン語文化圏に強い関心を持った人たちが多くに今更のごとく感心しました。講師はスペイン Alicante 出身の若い Joan Pomata 氏で、"Alicante, mediterráneamente (地中海そのものの町 Alicante)" のタイトルでお話をしてくれました。Joan さんは現在京都外国語大学でスペイン語講師として勤務されています。

さて Alicante という町は日本では余り知られていないようですが、Valencia 自治州の 3 つの県(Castellón, Valencia, Alicante) の中の 1 つです。温暖な気候で他のヨーロッパ諸国から多くの人が訪れる人気の保養地になっています。観光地としてだけでなく港湾都市で、物流拠点にもなっており、アルミニウムなどの工業も盛んな都市です。また、Alicante 大学はスペイン語を学びたい外国人を多く受け入れており、日本からの短期語学留学生も少なくないようです。

この地方には何世紀も前の歴史的建造物が多くあり、写真でも大層見栄えがありました。断崖絶壁の頂にある城などは、現在夜になるとライトアップされ幻想的な姿になり、そこから打ち上げられる花火には魅了されました。中でも一番印象的だったのは Las Hogueras de San Joan という火祭りでした。巨大な張子の人形を燃やして騒ぐ勇壮な祭りです。祭りの一環であるレコンキスタ時代の moros y cristianos (モロ人とキリスト教徒) の姿を模した仮装行列もエキゾチックで興味深いものでした。

そのほか Alicante に伝わる踊りや歌も紹介してくれました。事前の打ち合

わせでは、講師の Joan さんがご自身で踊って更に会の参加者にも踊りを教えてくれるとのことでしたが、話の方に熱が入りすっかり忘れ去られてしまいました。でも、それを埋めるに十分なほどの興味深い話の内容で、楽しい時間は瞬間に終わりました。

次回は 12 月 20 日です。来日されてまだ日が浅いグラナダ出身の大阪と京都でフラメンコを指導されている Carmen Alvarez さんが、¿Qué te parecen las Navidades Flamencas? (フラメンコ風クリスマスはいかが?) のタイトルで、アンダルシアのクリスマスの過ごし方のお話だけでなく、本格的な本場のフラメンコの踊りとカンテを披露して下さいになっています。どうぞお楽しみに!

文・写真提供 谷善三



次回開催のお知らせ

「¿Qué te parecen las Navidades Flamencas?」
(フラメンコ風クリスマスはいかが?)

日程：2014 年 12 月 20 日 (土) 午後 2:00~3:30

場所：〒662-0911 西宮市池田町 11-1 フレンテ西宮 4 階 (公財) 西宮市国際交流協会 会議室

電話：(0798)32-8680 FAX：(0798)32-8678 E-mail：nia930@sound.ocn.ne.jp

ゲスト：Carmen Alvarez さん 参加費：500 円 定員：30 名 (先着順)

※お申し込みは電話、FAX、E-mail にて / 11 月 10 日 (月) より受付開始



COLEGIO DE ESPAÑA
Since 1973

www.colegioespana.com
info@colegioespana.com

INTERNATIONAL SPANISH COURSES
Learn Spanish in Salamanca

- ・バラエティー豊かなコース
- ・一年を通して入学可能
- ・シニア歓迎
- ・講師向けトレーニング
- ・資格のあるネイティブ講師陣
- ・アクセスの良い好立地
- ・厳選された宿泊先を紹介

The best option to learn Spanish



**Calle Compañía nº 65.
37002 Salamanca. Spain.
Telef: (+34) 923 21 47 88
Fax: (+34) 923 21 87 91**

スペイン語作文の方法(表現編)

小池和良 著 四六変形判 290頁 CD付 定価2,730円

課題文 139・練習 417 題を訳しながら、文脈に応じた適切な語彙や表現を選択した上でスペイン語を書く力を養成。実践的な解説と豊富な例文によって、語彙の選択のミスを防ぐ語感を習得。課題文 139 の日本語・スペイン語解答例を対訳形式で CD に収録。本書にでている語彙や表現を網羅した詳しいスペイン語・日本語索引付。



〒162-0805 東京都新宿区矢来町 106

Tel. (03) 3267-8531 <http://www.daisan-shobo.co.jp>

第三書房



サン・オrale

〒851-2106
長崎県西彼杵郡時津町左底郷 290-1
TEL 095-860-8180 FAX 095-860-8181

京都スペイン語クラブ
Vamos a estudiar español!!

<京都駅近辺にて>
授業料：¥1,500
※参加時のみ
DVD鑑賞会：¥500 (月 1 回)

(お問い合わせ)
ky21@violin.ocn.ne.jp
090-1228-6110 ヨシモトまで

**週末
月2-3回**
見学自由です!



スペイン菓子工房 ドゥルセ・ミーナ

ーボルボロン、トゥロン手作りの店ー

茨城県守谷市ひがし野3-11-2
TEL 0297-45-2740
http://dulcemina.jp/

スペインタイルの絵付け教室
& 手作りタイル販売

スペインタイルアート工房

Tokyo/Osaka/Valencia (Spain)



大阪市西区南堀江 1-20-23-1003

Tel & Fax 06-4390-6545

Email: spaintile@japan.email.ne.jp

http://homepage1.nifty.com/spaintile/

CURSOS DE ESPAÑOL

～スペインとバスク文化の融合の街の伝統校～

- スペイン語一般コース
- スペイン語+インターンシッププログラム
- スペイン語+バスク料理
- スペイン語+サーフィン
- ホームステイ、ルームシェア、送迎サービス等

親切なスタッフと細かなサポート

一年を通して、短期留学から長期留学が可能

ラクサ・インターナショナルハウス・サンセバスチャン



info@lacunza.com

www.lacunza.com



International House
San Sebastian




Costa de Valencia
escuela de español

すべてのレベルに対応可能
(初級～教師研修まで)。
1クラス最大8人まで、宿泊施設完備、
毎週アクティビティ有り、
DELE対応授業有り、
サッカー観戦&プレー、お祭り、
綺麗な海、暖かい気候、日本人生徒歓迎。

www.costadevalencia.com
info@costadevalencia.com
Av. Blasco Ibáñez, 66
E-46021 Valencia




確かな技術と音楽する心を育てる

吉川二郎ギター教室

初心者歓迎！

コンサートフラメンコギター
クラシックギター & ギタルバ

花屋敷教室(宝塚市)

天満橋教室(大阪市)

東京教室(月1回)

静岡教室(月1回)

ギターサークルJIRO(富士市)

お問合せ・入会のお申込みは

TEL&FAX.072-793-8684

詳しくはホームページで

吉川二郎 検索

Yunoフラメンコ教室
神戸校・姫路校

Yuno
Flamenco

徳田悠乃
Yuno Tokuda

TEL:090-2701-7952 / 078-797-4303
E-mail:tacon.tacon@docomo.ne.jp



イラスト
デザイン
martín sánchez
画家

マルティン・サンチェス

www.jesumartinsanchez.com
iesusangel@gmail.com




ESTUDIO
Sampere desde 1956

スペイン語コース

集中コース

DELE試験対策

ジュニア/シニアプログラム

専門スペイン語

大学入学準備

スペイン語教師養成

ボランティアプログラム

旅行とスペイン語学習



CONTACT

T: +34 91 431 43 66

sampere@sampere.es

www.sampere.com

new webpage



LEARN SPANISH ABROAD
SPAIN · ECUADOR · CUBA



フラメンコスタジオ ミゲロン Flamenco Studio MIGUELON

現役で活躍中のプロが講師をするフラメンコ教室

ダンス(バイレ)クラス
ギター・歌・パルマクラス
生徒募集中!



●石橋スタジオ 池田市井口堂 1-9-3 センチュリーショウエイ VIIIF

●梅田スタジオ 大阪市北区太融寺町 8-10 梅田高速ビル 604

※ダンス(バイレ)クラス 十三スタジオ(アルディエンテ)にて開講中!

Tel 072-760-4858

E-mail miguelon@nifty.com WEB http://www.miguelon.jp/



Europe's
Best Airline

ターキッシュエアラインズでスペインへ

成田・関空からイスタンブール経由で、スペイン6都市へのアクセスがより便利に。



日本⇄イスタンブール直行便時刻表

東京（成田空港）⇒イスタンブール

便名	出発時刻	到着時刻
TK 51	12:55	18:10

イスタンブール⇒東京（成田空港）

便名	出発時刻	到着時刻
TK 50	17:10	11:30 +1

大阪（関西空港）⇒イスタンブール

便名	出発時刻	到着時刻
TK 47	23:20	05:45 +1

イスタンブール⇒大阪（関西空港）

便名	出発時刻	到着時刻
TK 46	00:50	18:45

イスタンブール⇄スペイン6都市運航時刻表

マドリード

イスタンブール⇒マドリード

便名	出発時刻	到着時刻
TK 1857	08:05	11:30
TK 1859	13:25	16:50
TK 1357	19:30	22:55

マドリード⇒イスタンブール

便名	出発時刻	到着時刻
TK 1858	12:25	17:40
TK 1860	17:50	23:05
TK 1358	23:55	04:45 +1

バルセロナ

イスタンブール⇒バルセロナ

便名	出発時刻	到着時刻
TK 1853	08:00	10:40
TK 1855	14:00	16:35
TK 1851	21:00	23:35

バルセロナ⇒イスタンブール

便名	出発時刻	到着時刻
TK 1852	06:00	10:30
TK 1854	11:35	16:05
TK 1856	17:35	22:05

マラガ

イスタンブール⇒マラガ

便名	出発時刻	到着時刻
TK 1305	09:40	13:10

マラガ⇒イスタンブール

便名	出発時刻	到着時刻
TK 1306	14:05	19:15

ビルバオ

イスタンブール⇒ビルバオ

便名	出発時刻	到着時刻
TK 1315	08:40	11:50

ビルバオ⇒イスタンブール

便名	出発時刻	到着時刻
TK 1316	16:50	21:45

バレンシア

イスタンブール⇒バレンシア

便名	出発時刻	到着時刻
TK 1301	10:10	13:05

バレンシア⇒イスタンブール

便名	出発時刻	到着時刻
TK 1302	14:05	18:50

＝サンティアゴ・デ・コンポステーラ＝ イスタンブール⇒サンティアゴ・デ・コンポステーラ

便名	出発時刻	到着時刻
TK 1315	08:40	13:50

サンティアゴ・デ・コンポステーラ⇒イスタンブール

便名	出発時刻	到着時刻
TK 1316	14:45	21:45

※上記は冬季（10月末～3月末）スケジュールになります。 ※到着時刻の+1は翌日という意味です。 ※TK50,TK51はB777-300ER TK46,TK47,TK52,TK53はA330が使用機材です。
※スケジュールは予告なく変更される場合があります。 ※詳しいスケジュールはトルコ航空のホームページ（www.turkishairlines.com）をご覧ください。



スペイン語の本 & 雑貨

www.

adelante
shop.jp

学習テキスト、文法問題集、レベル別副読本、
D.E.L.E. 試験対策本、絵本など
各種取り扱っています。送料全国一律280円
8,000円以上のお買い上げで送料無料!



スペイン語

ADELANTE

www.adelante.jp

Tel: 06-6346-5554

Fax: 06-6110-5122

email: info@adelante.jp

「私のスペイン語、通じた♪」を実感

- ・ネイティブ講師だからプチ留学気分です自然なスペイン語をマスター
- ・定員6名までの少人数制グループレッスン
- ・ヨーロッパ共通参照枠CEFのレベルに即したカリキュラム
- ・振替ができるので忙しくても安心
- ・楽しい交流パーティーや文化イベントでスペイン語仲間がいっぱい
- ・目的やペースに合わせて選べるコース
(一般・旅行・商業・DELE検定対策・プライベート・
スペイン語の本を読むコースetc.)

www.adelante.jp

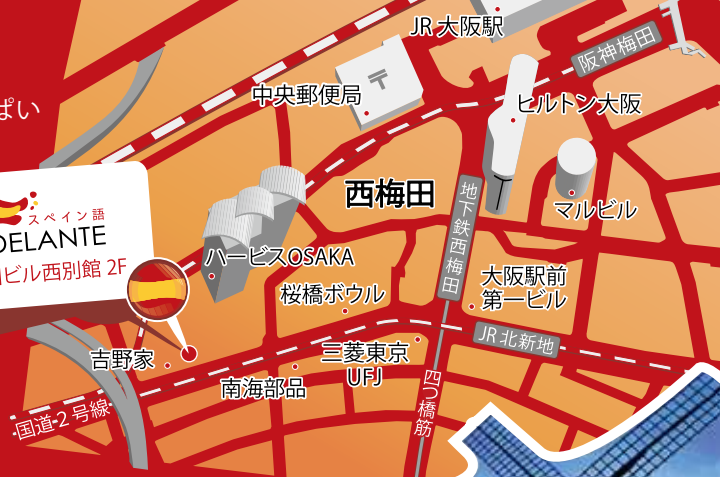
スペイン語教室 ADELANTE

〒530-0001 大阪市北区梅田2-5-8 千代田ビル西別館2F

TEL: 06-6346-5554・FAX: 06-6110-5122

E-mail: info@adelante.jp・http://www.adelante.jp

無料体験レッスン随時実施中!
お気軽にお問い合わせください。



www.spainryugaku.jp

スペイン留学.jpは
スペイン留学サポートのエキスパート。

【お問合せ】 TEL: 06-6346-5554 / email: info@spainryugaku.jp

スペイン & 中南米への留学相談、手続き代行無料サービス

安心して出発できるよう、全力でサポートいたします

1週間のプチ留学から長期プログラムまで、色々な目的に合わせて豊富なラインアップ。あなたにぴったりの留学スタイル選び、入学手続きまで無料でお手伝いいたします。語学留学、シニア向けのロングステイプログラム、スペイン語+フラメンコ、スペイン料理、スペインワイン講座、など楽しいプログラムもあります。

スペイン全土、メキシコ・チリ・ペルーなど数多くの語学学校と提携

言葉に自信がなく、学校とのやり取りが不安な方も大丈夫。
入学申請書類の作成や必要な書類の送付、留学費用の海外送金などは全て代行いたします。

- ・学校への出願サポート
- ・学生ビザ申請書記入のお手伝い
- ・留学費用の海外送金
- ・ホームステイ、寮、又はシェアフラット、アパート等の申込み
- ・空港出迎えサービスなど、
各種オプションサービスの依頼代行

